

三 前項ノ規定ハ兩國中一方ノ國ニ於テ設立セラレタル前記ノ會社及組合カ他ノ一方ノ國ニ於テ其ノ商業又ハ工業ニ從事スルコトニ認許セラレヘキヤ否ヤト何等ノ關係ヲ有セス共ノ認許ハ之ニ關シ右他ノ一方ノ國ニ於テ行ハルル法令ニ從フヘキモノトス

四 前數項ノ規定ハ會社及組合ニシテ本協約ノ調印前ニ設立セラレタルモノト共ノ以後ニ設立セラレタルモノトヲ同ハス均シク適用スルモノトス

本協約ハ調印ノ日ヨリ實施シ孰レカ一方カ廢棄ノ通告ヲ爲シタル日ヨリ一年後ニ至リ效力ヲ失フ  
 明治四十四年六月二十三日即露曆千九百一十一年六月十日(二十三日)東京ニ於テ本書ニ通テ作ル

小 村 壽 太 郎 印  
 ニコラ、マレウスキ、マレウイチ 印

朕權密顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十四年五月十九日瑞奧國ストンタホルムニ於テ日本瑞奧兩國全權委員ノ署名調印シタル通商航海條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

明治四十四年七月十二日

内閣總理大臣 公 曾 桂 太 郎  
 外務大臣 侯爵小村壽太郎

條約第五號(宣稱七月十三日)

日本國皇帝陛下及瑞奧國皇帝陛下ハ幸ニ其ノ間及其ノ臣民間ニ存在スル友好親善ノ關係ヲ鞏固ナラシメムコトヲ欲シ而シテ今後兩國間ノ通商關係ヲ律スヘキ條規ヲ明確ニ訂立スルハ此ノ善美ナル目的ヲ達スルニ資スヘキヲ信シ之カ爲ニ通商航海條約ヲ締結スルコトニ決定シ日本國皇帝陛下ハ瑞奧國駐劄特命全權公使杉村虎一ヲ瑞奧國皇帝陛下ハ外務大臣伯爵アルジド、トープヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ノ各地ニ到リ又ハ滞在スルコトニ付家族ト共ニ完全ナル自由ヲ有スヘク而シテ其ノ國法ニ遵由スルニ於テハ

一 旅行居住スルコト、醫學研究ヲ爲スコト、生業職業ニ從フコト、生業製造ノ業ヲ營ムコト及適法ナル商業ノ目的物タル各種商品ノ取引ニ從事スルノ權利ニ關スル一切ノ事項ニ付總テ最



惠國ノ臣民又ハ人民ト同一ノ基礎ニ置カルヘク

二 最惠國ノ臣民又ハ人民ト均シク必要ナル家屋、製造所、倉庫、店舗及附屬構造物ヲ所有又ハ貸借シテ之ヲ使用シ又住居、商業、生産業、製造業其ノ他適法ナル目的ノ爲土地ヲ貸借スルコトヲ得ヘク

三 身體及財産ニ對シテ常ニ完全ナル保護及保障ヲ享受シ其ノ權利ヲ行使擁護セムカ爲自由且容易ニ裁判所ニ申出ツルコトヲ得且國家及其ノ機關ニ對スル請求ニ付テモ管轄權ヲ有スル裁判所其ノ他ノ官廳ニ出訴スルノ權利ヲ有シ又司法ニ關スル其ノ他ノ事項ニ付内國臣民ノ享有スル一切ノ權利及特權ヲ均シク享有スヘク

四 陸軍、海軍、護國軍又ハ民兵ノ何レタルヲ問ハス總テノ強制兵役ヲ免レ且服役ノ代トシテ課セラルル一切ノ貢納並強募公債ヲ免レ其ノ他ノ軍用徵發又ハ取立金ニ付テハ内國臣民ニ課スルモノノ外之ヲ課セラレサルヘク

五 最惠國ノ臣民又ハ人民カ納付シ又ハ納付スルコトアルヘキ所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル何等ノ課金、租稅、手数料又ハ貢納ヲ徵收セララルコトナカルヘク

六 又還言其ノ他ノ方法ニ因ル動産ノ相續及適法ニ取得スルコトヲ得ヘキ各種財産一切ノ方法ニ因リ處分スル權利ニ關シ締約國ノ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ最惠國ノ臣民又ハ人民ト同一ノ特權、自由及權利ヲ享有シ且此等ノ事項ニ付最惠國ノ臣民又ハ人民ヨリ多額ナル租稅又ハ課金ヲ徵收セララルコトナカルヘキ

第二條

兩締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ有スル家宅、倉庫、製造所及店舗並一切ノ附屬構造物ニシテ適法ノ目的ニ使用セララルモノハ侵スヘカラス右建物又ハ附屬構造物ニ付テハ内國臣民ニ對スル法定ノ條件及方式ニ依ルノ外臨檢搜索ヲ爲シ又ハ帳簿、書類若ハ計算書ヲ檢査點閱スルコトヲ得ス

第三條

兩締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ港、都市其ノ他ノ場所ニ總領事、領事、副領事及領事事務官ヲ置クコトヲ得但シ右領事官ノ駐在ヲ認可スルニ便ナラサル場所ニ付テハ此ノ限ニ在ラス尤モ此ノ制限ハ一切ノ他國ニ對シテモ亦均シク之ヲ加フルニ非サレハ一方ノ締約國ニ對シテ之ヲ加フルコトヲ得ス

右總領事、領事、副領事及領事事務官ハ駐在國政府ヨリ認可狀其ノ他相當ノ證認狀ヲ得タルトキハ最惠國ノ同等領事官ニ認許セラレ又ハ認許セララルコトアルヘキ範圍内ニ於テ相互ノ條件ニ依リ職務ヲ執行シ並特權、特典及免除ヲ享有スルノ權利ヲ有スヘシ認可狀其ノ他ノ證認狀ヲ發給シタル政府ハ其ノ裁量ヲ以テ之ヲ取消スノ權利ヲ有ス但シ其ノ取消ヲ爲スニ付テハ之ヲ正當ト認メタル理由ヲ説明スヘシ

第四條

兩締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ死亡シタル場合ニ相續人又ハ還言執行者其ノ國ニ在ラサルトキハ死亡者所屬國ノ當該領事官ハ必要ナル手續ヲ履行シタル上自ラ又ハ代理人ニ由リ右不在者ヲ其ノ不在中代理シ相續財産ノ正當ナル管理及決濟ニ必要ナル一切ノ手續及行爲ヲ爲スノ權利ヲ有ス但シ本條ノ規定ハ本來財産所在國裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ニ付其ノ管轄權ヲ奪フモノト爲スコトヲ得ス

締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖外ニ於テ死亡シタルモ該版圖内ニ財産ヲ所有セル場合ニ相



續人又ハ遺言執行者右財產所在國ニ在ラサルトキハ亦前項ノ規定ヲ準用ス

第五條

兩締約國版圖ノ間ニハ相互ニ通商及航海ノ自由アルヘシ締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ外國通商ノ爲ニ開カレ又ハ開カルコトアルヘキ一切ノ場所 港及河川ニ最惠國ノ臣民又ハ人民ト均シク船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ルコトヲ得但シ常ニ到達國ノ國法ニ從フコトヲ要ス

第六條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ輸入セラルルモノニ對スル輸入税ハ今後兩國間ノ特別取極又ハ各自ノ國內法ニ依リテ之ヲ定ムヘシ  
締約國ノ孰レノ一方ヨリトモ他ノ一方ノ版圖ニ輸出セラルル物品ニ對シテ同様ノ物品カ別國ニ輸出セラルルニ當リ納付シ又ハ納付スルコトアルヘキ所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル何等ノ税金又ハ課金ヲ課スルコトヲ得ス

又締約國ノ孰レノ一方ヨリトモ他ノ一方ノ版圖ヨリノ物品ノ輸入又ハ該版圖ヘノ物品ノ輸出ニ對シテハ同様ノ物品ノ別國ヨリノ輸入又ハ別國ヘノ輸出ニ對シテ均シク適用セラレサル何等ノ禁止又ハ制限ヲ加フルコトヲ得ス但シ衛生上ノ措置トシテ又ハ動物及有用ノ植物ヲ保護スルノ目的ヲ以テ加フル禁止又ハ制限ハ此ノ限ニ在ラス

第七條

兩締約國ノ一方ノ臣民タル商工業者及該國ノ版圖内ニ於テ住所ヲ有シ其ノ業ヲ營ム商工業者ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ本自ラ又ハ旅商ヲ用ヒテ物品ヲ買入レ見本携帶又ハ不携帶ニテ注文ヲ取集ムルコトヲ得而シテ右商工業者及其ノ用フル旅商ハ買入ヲ爲シ又ハ注文ヲ取集ムルニ當リ課税

及便益ニ關シテ最惠國待遇ヲ享受スヘシ

前記ノ目的ヲ以テ見本トシテ輸入セラルル物品ハ其ノ再輸出セラルヘキコト又ハ法定期間内ニ再輸出セラレサル場合ニ成規ノ關稅ノ納付セラルヘキコトヲ確實ナラシムカ爲ニ制定セラレタル關稅法規及手續ヲ履行スルトキハ各締約國ニ於テ一時無稅輸入ヲ許可セラルヘシ但シ此ノ特權ハ物品ノ數量又ハ價格ニ徵シ見本ト認ムルコト能ハサルモノ又ハ其ノ性質上再輸出ノ際検査スルコト能ハサルモノニハ之ヲ與フルコトナシ見本カ無稅輸入ヲ許可セラルヘキモノタルト否トヲ決定スルハ何レノ場合ニ於テモ輸入地當該官廳ノ權内ニ專屬ス

第八條

兩締約國ノ一方ノ國法ニ從ヒテ既ニ設立セラレ又ハ今後設立セラレヘキ商工業及金融業ニ關スル株式會社其ノ他ノ會社及組合ニシテ該國版圖内ニ住所ヲ有スルモノハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ其ノ國法ニ違反セサル限り權利ヲ行使シ且原告又ハ被告トシテ裁判所ニ出頭スルコトヲ得  
前項ノ規定ハ兩締約國ノ一方ニ於テ設立セラレタル右會社又ハ組合カ他ノ一方ニ於テ營業ニ從事スルノ權利ヲ有スルヤ否ヤト何等ノ關係ヲ有セスレテ右權利ノ有無ハ常ニ各當該國ノ法令ニ依ルモノトス

第九條

兩締約國ノ一方ノ港ニ其ノ國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入セラレ又ハ輸入セラルルコトアルヘキ一切ノ物品ハ他ノ一方ノ船舶ヲ以テ亦均シク該港ニ之ヲ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ右物品ノ内國船舶ニ依リテ輸入セラルトキ課スル所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル税金又ハ課金ハ如何ナル名稱ヲ有スルモノナリトモ之ヲ課スルコトナシ右相互均等ノ待遇ハ該物品カ直接ニ製産原地ヨ



リ到ルト其ノ他ノ外國地方ヨリ到ルトヲ問ハス之ヲ實行スヘシ  
輸出ニ關シテモ右ト同様ニ全ク均等ノ待遇ヲ爲スヘク從テ兩締約國ノ一方ノ版圖内ニ於テ該版圖  
ヨリ適法ニ輸出セラレ又ハ輸出セララルコトアルヘキ物品ハ其ノ輸出カ日本船舶ニ依ルト瑞典船  
舶ニ依ルトヲ問ハス且其ノ仕向先カ締約國ノ他ノ一方ノ港タルト第三國ノ港タルトニ拘ラス之カ  
輸出ニ當リ同一ノ輸出稅ヲ納付シ又同一ノ獎勵金及戻稅ヲ受クヘシ

第十條

締約國ノ領水内ニ於ケル船舶ノ繫留及貨物ノ積卸ニ關スル一切ノ事項ニ付テハ締約國ニ於テ兩國  
ノ船舶ヲ全ク均等ニ待遇スルノ意思ナルニ因リ締約國ノ孰レノ一方ヲリトモ他ノ一方ノ船舶ニ對  
シ同様ノ場合ニ均シク許與セサル何等ノ特權又ハ便益ヲ自國船舶ニ許與スルコトナカルヘシ

第十一條

瑞典國又ハ日本國ノ國旗ヲ掲ケ且各本國法ニ規定スル國籍證明書類ヲ有スル商船ハ日本國又ハ瑞  
典國ニ於テ之ヲ瑞典船舶又ハ日本船舶ト認ムヘシ

第十二條

政府官公吏私人團體又ハ各種營造物ノ名義ヲ以テ又ハ其ノ利益ノ爲ニ課セラルル噸稅、通過稅、  
運河稅、港稅、水先案内料、燈臺稅、檢疫費其ノ他名稱ノ如何ニ拘ラス之ニ類似又ハ該當スル稅金又  
ハ課金ハ同様ノ場合ニ均シク內國船舶一般ニ又ハ最惠國船舶ニ課スルモノニ非サルハ締約國ノ一  
方ノ領水内ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課スルコトナレ右均等ノ待遇ハ兩國ノ船舶カ何レノ地  
ヨリ來リ又何レノ地ニ往クヲ問ハス相互ニ之ヲ實行スヘシ

第十三條

兩締約國ノ一方ノ定期郵便運送ノ任務ニ當ル船舶ハ國有タルト國家ヨリ之カ爲補助ヲ受クルモノ  
タルトノ別ナク他ノ一方ノ領水内ニ於テ同様ノ最惠國船舶ニ許與セララル便益、特權及免除ヲ享  
有スヘシ

第十四條

兩締約國ノ沿岸貿易ハ本條約ノ規定スル限ニ在ラス日本國及瑞典國各自ノ國法ノ定ムル所ニ依ル  
但シ締約國ノ一方ノ臣民及船舶ハ本件ニ關シ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ最惠國待遇ヲ享受スヘキモ  
ノトス

締約國ノ一方ノ船舶ニシテ他ノ一方ノ版圖内ノ二箇以上ノ輸入港ヘ仕向ケラレタル貨物ヲ外國ニ  
於テ積載シタルモノハ右諸港ノ一ニ於テ其ノ貨物ノ一部ヲ陸揚シ更ニ他ノ一港又ハ數港ニ續航シ  
テ其ノ地ニ貨物ノ殘部ヲ陸揚スルコトヲ得但シ常ニ到達國ノ國法、稅法及稅關規則ニ從フコトヲ  
要ス又同様ノ方法及同一ノ制限ニ依リ締約國ノ一方ノ船舶ハ他ノ一方ノ港ヨリ其ノ國外ニ向ヒ發  
航ノ途次該國ノ數港ニ於テ貨物ヲ積積スルコトヲ得

第十五條

兩締約國ノ一方ノ當該領事官ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ自國商船内ノ秩序ヲ專管シ海上又ハ駐在  
國領水内ニ於テ船長、職員其ノ他ノ船員間ニ生スル紛議殊ニ給料ノ決定及契約ノ履行ニ關シテ生  
スル紛議ヲ單獨ニテ處辨スヘシ但シ締約國ノ一方ノ領水内ニ在ル他ノ一方ノ商船内ニ騷擾ノ發生  
シタルトキ其ノ發生地ノ當該官廳ニ於テ之カ爲港内又ハ陸上ノ安寧秩序ヲ妨害スルカ或ハ其ノ政  
アリト認ムル場合ニハ當該內國官廳之ヲ管轄スヘシ



第十六條

兩締約國ノ一方ノ國籍ヲ有スル船舶ニシテ他ノ一方ノ領水内ニ在ルモノノ船員脱船シタルトキ脱船者ノ逮捕及引渡ノ爲該船舶所屬國ノ當該領事官ニ於テ一切之ニ關スル費用ノ償還セラルヘキコトヲ保障シテ請求シタル場合ニハ地方官廳ハ國法ノ許ス限リ其ノ權内ニ在ル各般ノ援助ヲ與フルコトヲ要ス

右ノ規定ハ脱船地ノ國ノ臣民ニ關シテハ之ヲ適用セサルモノトス

第十七條

兩締約國ノ一方ハ局外中立ノ義務ニ反セサル限リ他ノ一方ノ船舶ニ對シ難破海上損害又ハ不可抗力ニ因ル寄航ノ場合ニ其ノ國有タルト簡人ノ所有タルト問ハス同様ノ場合ニ内國船舶ニ許スルト同一ノ援助救護及免除ヲ許スヘシ右難破又ハ被害船舶ヨリ救上ケタル貨物ニ對シテハ關稅ヲ免除ス但シ内地消費ノ爲引取ラルル場合ニハ成規ノ關稅ヲ納付スヘシ

締約國ノ一方ノ船舶カ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ擱坐シ又ハ難破シタルトキハ地方官廳ハ最近地ニ駐在セル當該領事官ニ之ヲ通知スヘシ

各締約國領事官ハ自國民ニ必要ナル援助ヲ與フルコトヲ得

第十八條

本條約ニ於テ別段ノ明文アル場合ヲ除クノ外兩締約國ハ通商航海及工業ニ關スル一切ノ事項ニ付其ノ一方カ別國ノ臣民又ハ人民ニ現ニ許與シ又ハ今後許與スルコトアルヘキ一切ノ特權恩典又ハ免除ヲ即時且無條件ニテ他ノ一方ノ臣民ニ及ホスヘキコトニ同意ス

第十九條

本條約ノ規定ハ各締約國ノ領有レ又ハ管治スル一切ノ地域ニ之ヲ適用スヘシ

第二十條

本條約ハ明治四十四年七月十七日即千九百一十一年七月十七日ヨリ實施シ明治五十六年七月十六日即千九百二十三年七月十六日迄效力ヲ有ス

右期間満了ノ十二月前ニ兩締約國ノ孰レヨリモ本條約ヲ消滅セシムルノ意思ヲ他ノ一方ニ通告セサルトキハ本條約ハ締約國ノ一方カ其ノ廢棄ヲ聲明シタル日ヨリ一年ノ期間ノ満了ニ至ル迄引續キ效力ヲ有ス

第二十一條

本條約ハ批准ヲ要ス其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交換スヘシ

右證據トシテ各全權委員本條約佛文ニ通ニ署名調印ス

明治四十四年五月十九日即千九百一十一年五月十九日「ストックホルム」ニ於テ之ヲ作ル

杉村虎一 印  
ト ー プ 印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル日本國皇帝(御名)此ノ容ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕明治四十四年五月十九日「ストックホルム」ニ於テ帝國全權委員カ瑞典國全權委員ト共ニ署名調印シタル通商航海條約ヲ閱覽點檢シ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百七十一年明治四十四年七月十一日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム



御名 國 璽

外務大臣 侯爵小村壽太郎

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十四年五月十九日瑞典國「ストックホルム」ニ於テ日本瑞典兩國全權委員ノ署名調印シタル特別相互關稅條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御 璽

明治四十四年七月十二日

内閣總理大臣 公爵桂 太郎  
外務大臣 侯爵小村壽太郎

條約第六號(官報 七月十三日)

日本國皇帝陛下及瑞典國皇帝陛下ハ兩國間通商關係ノ發達ヲ助成セムコトヲ欲シ之カ爲ニ特別相互關稅條約ヲ締結スルコトニ決定シ日本國皇帝陛下ハ瑞典國駐劄特命全權公使杉村彪一ヲ瑞典國皇帝陛下ハ外務大臣伯爵アルヴィド、トープヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ハ他ノ一方ノ版圖内ニ輸入セラルルニ當リ別國ノ製産ニ係ル同様ノ物品ニ適用セララルル最低率ノ關稅ヲ課セラルヘシ

第二條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ正當ニ輸入セラルタルモノニ對シテハ内國ノ製産ニ係ル同様ノ物品ニ課シ又ハ課スルコトアルヘキ所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル何等ノ入市稅、通過稅、庫敷料又ハ消費稅ヲ課スルコトナシ

第三條

兩締約國ハ製産原地證明書ヲ提出スルノ義務ヲ一般ニ免除スヘキコトニ同意ス但シ締約國ノ一方ニ於テ輸入品ニ關シニ種以上ノ關稅率アルトキハ他ノ一方ヨリノ輸入品ヲシテ最低稅率ノ適用ヲ受ケシメムカ爲特ニ此ノ場合ニ限リ製産原地證明書ノ提出ヲ求ムルコトヲ得

第四條

本條約ノ規定ハ各締約國ノ領有シ又ハ管治スル一切ノ地域ニ之ヲ適用スヘシ

第五條

左ニ掲グルモノニハ本條約ノ效力ヲ及ホサス

- 第一 兩締約國ノ内國民漁業ノ產物及漁產ノ輸入ニ關シテ内國民漁業ニ準セラルル漁業ノ產物
- 第二 各締約國カ接壤國ニ對シ國境貿易ニ便ナラシメムカ爲特ニ許與シ又ハ許與スルコトアルヘキ關稅上ノ殊遇
- 第三 瑞典國ヨリ諾威國ニ許與シ又ハ許與スルコトアルヘキ特殊ノ便益ニシテ別國ニ許與セラレサルモノ



第六條

本條約ハ明治四十四年七月十七日即千九百一十一年七月十七日ヨリ實施シ兩締約國ノ一方カ本條約ヲ消滅セシムルノ意思ヲ他ノ一方ニ通告シタル日ヨリ十二月ヲ經過スル迄其ノ效力ヲ有ス

第七條

本條約ハ批准ヲ要ス共ノ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交換スヘシ  
右證據トシテ各全權委員本條約佛文ニ通ニ署名關印ス

明治四十四年五月十九日即千九百一十一年五月十九日「ストックホルム」ニ於テ之ヲ作ル

杉村虎一印  
ト一ノ印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル日本國皇帝(御名)此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕明治四十四年五月十九日「ストックホルム」ニ於テ帝國全權委員カ瑞典國全權委員ト共ニ署名關印シタル特別相互關稅條約ヲ閱覽點檢シ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百七十一年明治四十四年七月十一日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國璽

外務大臣 侯爵小村壽太郎

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十四年六月十八日諾威國「クリスタニア」ニ於テ日諾兩國全權委員ノ署名關印シタル通商航海條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十四年七月十五日

内閣總理大臣 公爵桂 太郎  
外務大臣 侯爵小村壽太郎

條約第七號

日本國皇帝陛下及諾威國皇帝陛下ハ幸ニ其ノ間及其ノ臣民間ニ存在スル友好親善ノ關係ヲ鞏固ナラシメムコトヲ欲シ而シテ今後兩國間ノ通商關係ヲ律スヘキ條規ヲ明確ニ訂立スルハ此ノ善美ナル目的ヲ達スルニ資スヘキヲ信シ之カ爲ニ通商航海條約ヲ締結スルコトニ決定シ日本國皇帝陛下ハ諾威國駐劄特命全權公使杉村虎一ヲ諾威國皇帝陛下ハ外務大臣ヨハネス・イェルゲンズヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ノ各地ニ到リ又ハ滞在スルコトニ付家族ト共ニ完全ナル自由ヲ有スヘク而シテ其ノ國法ニ遵由スルニ於テハ

- 一 旅行居住スルコト、修學研究ヲ爲スコト、生業職業ニ從フコト、生産製造ノ業ヲ營ムコト及通法ナル商業ノ目的物タル各種商品ノ取引ニ從事スルノ權利ニ關スル一切ノ事項ニ付總テ最



- 一 惠國ノ臣民又ハ人民ト同一ノ基礎ニ置カルヘク
- 二 最惠國ノ臣民又ハ人民ト均シク必要ナル家屋、製造所、倉庫、店舗及附屬構造物ヲ所有又ハ賃借シテ之ヲ使用シ又住居、商業、生産業、製造業共ノ他適法ナル目的ノ爲土地ヲ賃借スルコトヲ得ヘク
- 三 身體及財産ニ對シテ常ニ完全ナル保護及保障ヲ享受シ共ノ權利ヲ行使擁護セムカ爲自由且容易ニ裁判所ニ申出ツルコトヲ得且國家及其ノ機關ニ對スル請求ニ付テモ管轄權ヲ有スル裁判所共ノ他ノ官廳ニ出訴スルノ權利ヲ有シ又司法ニ關スル共ノ他ノ事項ニ付内國臣民ノ享有スル一切ノ權利及特權ヲ均シク享有スヘク
- 四 陸軍、海軍、護國軍又ハ民兵ノ何レタルヲ問ハズ總テノ強制兵役ハ最惠國ノ臣民又ハ人民カ同様ノ義務ヲ負擔スル場合ヲ除クノ外之ヲ免レ且服役ノ代トレテ課セラルル一切ノ貢納並強募公債ヲ免レ共ノ他ノ軍用徵發又ハ取立金ニ付テハ内國臣民ニ課スルモノノ外之ヲ課セラレサルヘク
- 五 最惠國ノ臣民又ハ人民カ納付シ又ハ納付スルコトアルヘキ所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル何等ノ課金、租稅、手数料又ハ貢納ヲ徵收セラルルコトナカルヘク
- 六 又遺言共ノ他ノ方法ニ因ル動産ノ相續及適法ニ取得スルコトヲ得ヘキ各種財産ヲ一切ノ方法ニ因リ處分スル權利ニ關シ締約國ノ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ最惠國ノ臣民又ハ人民ト同一ノ特權、自由及權利ヲ享有シ且此等ノ事項ニ付最惠國ノ臣民又ハ人民ヨリモ多額ナル租稅又ハ課金ヲ徵收セラルルコトナカルヘシ

第二條

兩締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ有スル家宅、倉庫、製造所及店舗並一切ノ附屬構造物ニシテ適法ノ目的ニ使用セラルルモノハ侵害ヘカラス右建物又ハ附屬構造物ニ付テハ内國臣民ニ對スル法定ノ條件及方式ニ依ルノ外臨檢搜索ヲ爲シ又ハ帳簿、書類若ハ計算書ヲ檢査點閱スルコトヲ得ス

第三條

兩締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ港、都市共ノ他ノ場所ニ總領事、領事、副領事及領事事務官ヲ置クコトヲ得但シ右領事官ノ駐在ヲ認可スルニ便ナラサル場所ニ付テハ此ノ限ニ在ラス尤モ此ノ制限ハ一切ノ他國ニ對シテモ亦均シク之ヲ加フルニ非サレハ一方ノ締約國ニ對シテ之ヲ加フルコトヲ得ス

右總領事、領事、副領事及領事事務官ハ駐在國政府ヨリ認可狀其ノ他相當ノ證認狀ヲ得タルトキハ最惠國ノ同等領事官ニ認許セラレ又ハ認許セラルルコトアルヘキ範圍内ニ於テ相互ノ條件ニ依リ職務ヲ執行シ並特權、特典及免除ヲ享有スルノ權利ヲ有スヘシ 認可狀共ノ他ノ證認狀ヲ發給シタル政府ハ其ノ裁量ヲ以テ之ヲ取消スノ權利ヲ有ス但シ其ノ取消ヲ爲スニ付テハ之ヲ正當ト認メタル理由ヲ説明スヘシ

第四條

兩締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ死亡シタル場合ニ相續人又ハ遺言執行者共ノ國ニ在ラサルトキハ死亡者所屬國ノ當該領事官ハ必要ナル手續ヲ履行シタル上自ラ又ハ代理人ニ由リ右不在者ヲ其ノ不在中代理シ相續財産ノ正當ナル管理及決済ニ必要ナル一切ノ手續及行爲ヲ爲スノ權利ヲ有ス但シ本條ノ規定ハ本來財産所在國裁判所ノ管轄ニ關スル事件ニ付共ノ管轄權ヲ奪



フモノト爲スコトヲ得ス

締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版圖外ニ於テ死亡シタルモ該版圖内ニ財產ヲ所有セル場合ニ相續人又ハ遺言執行者右財產所在國ニ在ラサルトキハ亦前項ノ規定ヲ準用ス

第五條

兩締約國版圖ノ間ニハ相互ニ通商及航海ノ自由アルヘシ締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ外國通商ノ爲ニ開カレ又ハ開カルコトアルヘキ一切ノ場所、港及河川ニ最惠國ノ臣民又ハ人民ト均シク船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ルコトヲ得但シ常ニ到達國ノ國法ニ從フコトヲ要ス

第六條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ輸入セラルルモノニ對スル輸入税ハ今後兩國間ノ特別取極又ハ各自ノ國內法ニ依リテ之ヲ定ムヘシ  
締約國ノ孰レノ一方タリトモ他ノ一方ノ版圖ニ輸出セラルル物品ニ對シ同様ノ物品カ別國ニ輸出セラルルニ當リ納付シ又ハ納付スルコトアルヘキ所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル何等ノ税金又ハ課金ヲ課スルコトヲ得ス

又締約國ノ孰レノ一方タリトモ他ノ一方ノ版圖ヨリノ物品ノ輸入又ハ該版圖ヘノ物品ノ輸出ニ對シテハ同様ノ物品ノ別國ヨリノ輸入又ハ別國ヘノ輸出ニ對シテ均シク適用セラレサル何等ノ禁止又ハ制限ヲ加フルコトヲ得ス但シ衛生上ノ措置トシテ又ハ動物及有用ノ植物ヲ保護スルノ目的ヲ以テ加フル禁止又ハ制限ハ此ノ限ニ在ラス

第七條

兩締約國ノ一方ノ國法ニ從ヒテ既ニ設立セラレ又ハ今後設立セラルヘキ商工業及金融業ニ關スル

株式會社其ノ他ノ會社及組合ニシテ該國版圖内ニ住所ヲ有スルモノハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ其ノ國法ニ違反セサル限り權利ヲ行使シ且原告又ハ被告トシテ裁判所ニ出頭スルコトヲ得  
前項ノ規定ハ兩締約國ノ一方ニ於テ設立セラレタル右會社又ハ組合カ他ノ一方ニ於テ營業ニ從事スルノ權利ヲ有スルヤ否ヤト何等ノ關係ヲ有セスシテ右權利ノ有無ハ常ニ各該國ノ法令ニ依ルモノトス

第八條

兩締約國ノ一方ノ港ニ其ノ國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入セラレ又ハ輸入セラルルコトアルヘキ一切ノ物品ハ他ノ一方ノ船舶ヲ以テ亦均シク該港ニ之ヲ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ右物品ノ内國船舶ニ依リテ輸入セラルルトキ課スル所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル税金又ハ課金ハ如何ナル名稱ヲ有スルモノタリトモ之ヲ課スルコトナシ右相互均等ノ待遇ハ該物品カ直接ニ製産原地ヨリ到ルト共ノ他ノ外國地方ヨリ到ルト同トナシ之ヲ實行スヘシ

輸出ニ關シテモ右ト同様ニ全ク均等ノ待遇ヲ爲スヘシ從テ兩締約國ノ一方ノ版圖内ニ於テ該版圖ヨリ適法ニ輸出セラレ又ハ輸出セラルルコトアルヘキ物品ハ其ノ輸出カ日本船舶ニ依ルトモ該船舶ニ依ルトモ同トナシ且其ノ仕向先カ締約國ノ他ノ一方ノ港タルト第三國ノ港タルトニ拘ラス之カ輸出ニ當リ同一ノ輸出税ヲ納付シ又同一ノ獎勵金及戻税ヲ受クヘシ

第九條

締約國ノ領水内ニ於ケル船舶ノ繫留及貨物ノ積卸ニ關スル一切ノ事項ニ付テハ締約國ニ於テ兩國ノ船舶ヲ全ク均等ニ待遇スルノ意思ナルニ因リ締約國ノ孰レノ一方タリトモ他ノ一方ノ船舶ニ對シ同様ノ場合ニ均シク許與セサル何等ノ特權又ハ便益ヲ自國船舶ニ許與スルコトナカルヘシ



第十條

諸威國又ハ日本國ノ國旗ヲ掲ケ且各本國法ニ規定スル國籍證明書類ヲ有スル商船ハ日本國又ハ諸威國ニ於テ之ヲ諸威船船又ハ日本船船ト認ムヘシ

第十一條

政府、官公吏、私人、團體又ハ各種營造物ノ名義ヲ以テ又ハ其ノ利益ノ爲ニ課セラルル噸稅、通過稅、運河稅、港稅、水先案内料、燈臺稅、檢疫費其ノ他名稱ノ如何ニ拘ラス之ニ類似又ハ該當スル稅金又ハ課金ハ同様ノ場合ニ均シク内國船舶一般ニ又ハ最惠國船舶ニ課スルモノニ非サレハ締約國ノ一方ノ領水内ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課スルコトナシ右均等ノ待遇ハ兩國ノ船舶カ何レノ地ヨリ來リ又何レノ地ニ往クヲ問ハス相互ニ之ヲ實行スヘシ

第十二條

兩締約國ノ一方ノ定期郵便運送ノ任務ニ當ル船舶ハ國有タルト國家ヨリ之カ爲補助ヲ受クルモノタルトノ別ナリ他ノ一方ノ領水内ニ於テ同様ノ最惠國船舶ニ許與セラルル便益、特權及免除ヲ享有スヘシ

第十三條

兩締約國ノ沿岸貿易ハ本條約ノ規定スル限ニ在ラス日本國及諸威國各自ノ國法ノ定ムル所ニ依ル但シ締約國ノ一方ノ臣民及船舶ハ本件ニ關シ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ最惠國待遇ヲ享受スヘキモノトス

締約國ノ一方ノ船舶ニシテ他ノ一方ノ版圖内ノ二箇以上ノ輸入港ヘ仕向ケラレタル貨物ヲ外國ニ於テ積載シタルモノハ右諸港ノ一ニ於テ其ノ貨物ノ一部ヲ陸揚シ更ニ他ノ一港又ハ數港ニ續航シ

テ其ノ地ニ貨物ノ殘部ヲ陸揚スルコトヲ得但シ常ニ到達國ノ國法、稅法及稅關規則ニ從フコトヲ要ス又同様ノ方法及同一ノ制限ニ依リ締約國ノ一方ノ船舶ハ他ノ一方ノ港ヨリ其ノ國外ニ向ヒ發航ノ途次該國ノ數港ニ於テ貨物ヲ積積スルコトヲ得

第十四條

兩締約國ノ一方ノ當該領事官ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ自國商船内ノ秩序ヲ專管シ海上又ハ駐在國領水内ニ於テ船長、職員其ノ他ノ船員間ニ生スル紛議殊ニ給料ノ決定及契約ノ履行ニ關シテ生スル紛議ヲ單獨ニテ處辨スヘシ但シ締約國ノ一方ノ領水内ニ在ル他ノ一方ノ商船内ニ發生シタルトキ其ノ發生地ノ當該官廳ニ於テ之カ爲港内又ハ陸上ノ安寧秩序ヲ妨害スルカ或ハ其ノ虞アリト認ムル場合ニハ當該内國官廳之ヲ管轄スヘシ

第十五條

兩締約國ノ一方ノ國籍ヲ有スル船舶ニシテ他ノ一方ノ領水内ニ在ルモノノ船員脫船シタルトキ脫船者ノ逮捕及引渡ノ爲該船舶所屬國ノ當該領事官ニ於テ一切之ニ關スル費用ノ償還セラルヘキコトヲ保障シテ請求シタル場合ニハ地方官廳ハ國法ノ許ス限リ其ノ權内ニ在ル各般ノ援助ヲ與フルコトヲ要ス

第十六條

兩締約國ノ一方ハ局外中立ノ義務ニ反セサル限リ他ノ一方ノ船舶ニ對シ難破、海上損害又ハ不可抗力ニ因ル寄航ノ場合ニ其ノ國有タルト箇人ノ所有タルトヲ問ハス同様ノ場合ニ内國船舶ニ許與スルト同一ノ援助、救護及免除ヲ許與スヘシ右難破又ハ被害船舶ヨリ救上ケタル貨物ニ對シテハ



關稅ヲ免除ス但シ内地消費ノ爲引取ラルル場合ニハ成規ノ關稅ヲ納付スヘシ  
締約國ノ一方ノ船舶カ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ擱坐シ又ハ難破シタルトキハ地方官廳ハ最近地ニ駐  
在セル當該領事官ニ之ヲ通知スヘシ  
各締約國領事官ハ自國民ニ必要ナル援助ヲ與フルコトヲ得

第十七條

本條約ニ於テ別段ノ明文アル場合ヲ除クノ外兩締約國ハ通商航海及工業ニ關スル一切ノ事項ニ  
付其ノ一方カ別國ノ臣民又ハ人民ニ現ニ許與シ又ハ今後許與スルコトアルヘキ一切ノ特權恩典  
又ハ免除ヲ即時且無條件ニテ他ノ一方ノ臣民ニ及ホスヘキコトニ同意ス

本條約ノ規定ハ締約國ノ一方カ國境關係ヲ便ナラシムカ爲接境國ニ許與シ又ハ許與スルコトアルヘキ特殊ノ利益及關稅同盟ノ  
ルヘキ特殊ノ利益、諾威國カ瑞典國ニ許與シ又ハ許與スルコトアルヘキ特殊ノ利益及關稅同盟ノ  
締結ニ基ク利益ニシテ別國ニ許與セラレサルモノニハ之ヲ適用セス

第十八條

本條約ノ規定ハ各締約國ノ領有シ又ハ管治スル一切ノ地域ニ之ヲ適用スヘシ

第十九條

本條約ハ明治四十四年七月十七日即千九百一十一年七月十七日ヨリ實施シ明治五十六年七月十六日  
即千九百二十三年七月十六日迄效力ヲ有ス

右期間滿了ノ十二月前ニ兩締約國ノ孰レヨリモ本條約ヲ消滅セシムルノ意思ヲ他ノ一方ニ通告セ  
サルトキハ本條約ハ締約國ノ一方カ其ノ廢棄ヲ聲明シタル日ヨリ一年ノ期間ノ滿了ニ至ル迄引續  
キ效力ヲ有ス

第二十條

本條約ハ批准ヲ要ス其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交換スヘシ  
右證據トシテ各全權委員本條約佛文ニ通ニ署名調印ス

明治四十四年六月十六日即千九百一十一年六月十六日「クリスチアニア」ニ於テ之ヲ作ル

杉村 虎一 印  
シニールゲンス 印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル日本國皇帝(御名)此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕明治四十四年六月十六日「クリスチアニア」ニ於テ帝國全權委員カ諾威國全權委員ト共ニ署名調  
印シタル通商航海條約ヲ閱覽點檢シ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百七十一年明治四十四年七月十五日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐  
セシム

御名 國璽

外務大臣 侯爵小村壽太郎

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十四年六月十六日諾威國「クリスチアニア」ニ於テ日諾兩國全權委  
員ノ署名調印シタル特別相互關稅條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽



明治四十四年七月十五日

内閣總理大臣 公爵桂 太郎  
外務大臣 侯爵小村壽太郎

條約第八號

日本國皇帝陛下及諾威國皇帝陛下ハ兩國間通商關係ノ發達ヲ助成セムコトヲ欲シ之カ爲ニ特別相互關稅條約ヲ締結スルコトニ決定シ日本國皇帝陛下ハ諾威國駐劄特命全權公使杉村虎一ヲ諾威國皇帝陛下ハ外務大臣ヨハネス、イルゲンヌヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ハ他ノ一方ノ版圖内ニ輸入セララルニ當リ別國ノ製産ニ係ル同様ノ物品ニ適用セララル最低率ノ關稅ヲ課セララルヘシ

第二條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ正當ニ輸入セラレタルモノニ對シテハ内國ノ製産ニ係ル同様ノ物品ニ課シ又ハ課スルコトアルヘキ所ト異ナルカ成ハ之ヨリ多額ナル何等ノ入市稅、通過稅、庫敷料又ハ消費稅ヲ課スルコトナレ  
尤モ麥ニ關シテハ相互ニ最惠國待遇ヲ許與スルニ止マルモノトス

第三條

兩締約國ハ製産原地證明書ヲ提出スルノ義務ヲ一般ニ免除スヘキコトニ同意ス但シ締約國ノ一方ハ他ノ一方ヨリノ輸入品ヲシテ最低稅率ノ適用ヲ受ケシメムカ爲例外トシテ製産原地證明書ノ提

出ヲ求ムルコトヲ得尤モ同様ノ最惠國物品ニ對シテモ均シク之カ提出ヲ求ムル場合ニ限ルモノトス

第四條

本條約ノ規定ハ各締約國ノ領有シ又ハ管治スル一切ノ地域ニ之ヲ適用スヘシ

第五條

左ニ掲クルモノニハ本條約ノ效力ヲ及ボサス

第一 兩締約國ノ内國民漁業ノ產物及漁產ノ輸入ニ關シテ内國民漁業ニ準セララル漁業ノ產物

第二 各締約國カ接境國ニ對シ國境貿易ニ便ナラシメムカ爲特ニ許與シ又ハ許與スルコトアル

ヘキ關稅上ノ殊遇

第三 諾威國ヨリ瑞典國ニ許與シ又ハ許與スルコトアルヘキ特殊ノ利益及關稅同盟ノ締結ニ基

ク利益ニシテ別國ニ許與セラレサルモノ

第六條

本條約ハ明治四十四年七月十七日即千九百十一年七月十七日ヨリ實施シ兩締約國ノ一方カ本條約ヲ消滅セシムルノ意思ヲ他ノ一方ニ通告シタル日ヨリ十二月ヲ經過スル迄其ノ效力ヲ有ス

第七條

本條約ハ批准ヲ要ス其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交換スヘシ  
右證據トシテ各全權委員本條約佛文ニ通ニ署名調印ス  
明治四十四年六月十六日即千九百十一年六月十六日「クリスチアニア」ニ於テ之ヲ作ル

杉村 虎一 印  
シニ、イルゲンス 印



天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル日本國皇帝(御名)此ノ書ヲ見ル有テ宣示ス  
朕明治四十四年六月十六日「クリスチアニア」ニ於テ帝國全權委員カ 諸威國全權委員ト共ニ署名調  
印シタル特別相互關稅條約ヲ閱覽點檢シ之ヲ嘉納批准ス  
神武天皇即位紀元二千五百七十一年明治四十四年七月十五日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐  
セシム

御名 國璽

外務大臣 侯爵小村壽太郎

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十四年六月二十四日獨逸國伯林ニ於テ日獨兩國全權委員ノ署名調  
印シタル日獨通商航海條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十四年七月十五日

内閣總理大臣 公爵桂 太郎  
外務大臣 侯爵小村壽太郎

條約第九號

日獨通商航海條約

日本國皇帝陛下及獨逸帝國ノ名ヲ以テスル獨逸皇帝普魯西國皇帝陛下ハ齊シク兩國間ノ經濟關係  
ヲ圓滑ナラシメ且之ヲ増進セシムコトヲ欲シ之カ爲ニ通商航海條約ヲ締結スルコトニ決定シ日

本國皇帝陛下ハ獨逸國駐劄特命全權大使從三位勳一等男爵珍田捨巳ヲ獨逸皇帝普魯西國皇帝陛下  
ハ外務大臣「コンセイニエ、アンチーム、アクチニエル、アルフレッド、フオン、キダーレンウニヒター」ヲ  
各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル  
後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

兩締約國ノ一方ノ國民ハ他ノ一方ノ版圖内ノ各地ニ到リ又ハ滞在スルコトニ付完全ナル自由ヲ有  
スヘシ

該國民ハ國法ニ違由スルニ於テハ左記ノ權利ヲ享有スヘシ

- 一 居住スルコト、修學研究ヲ爲スコト、生業職業ニ從フコト及生産製造ノ業ヲ營ムコトニ關ス  
ル一切ノ事項ニ付總テ最惠國ノ國民ト同一ノ基礎ニ置カルヘシ
- 二 内國民ト均シク締約國ノ他ノ一方ノ版圖内ヲ旅行スルノ權利ヲ有シ又適法ナル商業ノ目的  
物タル各種商品ノ取引ニ從事スルノ權利ヲ有スヘシ
- 三 家屋、製造所、倉庫、店舗及附屬構造物ヲ所有又ハ賃借シテ之ヲ使用シ又住居、商業、生産業製  
造業其ノ他適法ナル目的ノ爲土地ヲ賃借スルコトヲ得ヘシ
- 四 各種動産ヲ占有スルコト、生存者間ニ於テ適法ニ取得シ得ヘキ各種動産ヲ遺言其ノ他ノ方  
法ニ因リテ相續スルコト及適法ニ取得シ得ル各種財産ヲ一切ノ方法ニ因リテ處分スルコト  
ニ關シ内國民又ハ最惠國ノ國民ト同一ノ特權、自由及權利ヲ享有シ且此等ノ事項ニ付内國  
民又ハ最惠國ノ國民ヨリモ多額ナル何等ノ租稅又ハ課金ヲ課セラルコトナカルヘシ
- 五 國法ニ依リ別國ノ國民カ取得占有スルコトヲ得又ハ得ルコトアルヘキ各種ノ不動産ヲ相互



ノ條件ニ依リ且常ニ右國法ノ定ムル條件及制限ニ從ヒ取得占有スルコトヲ得ヘク  
 六 陸軍、海軍、護國軍又ハ民兵ノ何レタルヲ問ハス總テノ強制兵役ヲ免レ且服役ノ代トシテ課  
 セラルル一切ノ租稅並強募公債ヲ免ルヘク内國民又ハ最惠國ノ國民ト同一ノ條件及基礎ニ  
 依ルノ外如何ナル軍用徵發又ハ取立金ヲ課セラルルコトナカルヘク  
 七 又何等ノ名義ヲ以テスルモ内國民又ハ最惠國ノ國民カ納付シ又ハ納付スルコトアルヘキ所  
 ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル課金又ハ租稅ヲ徵收セラルルコトナカルヘレ

第二條

兩締約國ノ一方ノ國民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ有スル家宅、倉庫、製造所及店舗竝一切ノ附屬構  
 造物ハ使スヘカラス右建物又ハ附屬構造物ニ付テハ内國民ニ對スル法定ノ條件及方式ニ依ルノ外  
 臨檢搜索ヲ爲シ又ハ帳簿、書類若ハ計算書ヲ檢査點閱スルコトヲ得ス

第三條

兩締約國版圖ノ間ニハ相互ニ通商及航海ノ自由アルヘシ  
 締約國ノ一方ノ國民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ外國通商ノ爲ニ開カレ又ハ開カルコトアルヘキ  
 一切ノ場所、港及河川ニ船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ルコトヲ得但シ常ニ到達國ノ國法ニ從フコト  
 ヲ要ス

第四條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ輸入セラルルモノ  
 ニ對スル輸入稅ハ兩國間ノ特別取極又ハ各自ノ國內法ニ依リテ之ヲ定ムヘシ  
 締約國ノ孰レノ一方ヲリトモ他ノ一方ノ版圖ニ輸出セラルル物品ニ對シ同様ノ物品カ別國ニ輸出

セラルルニ當リ納付シ又ハ納付スルコトアルヘキ所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル何等ノ税金又  
 ハ課金ヲ課スルコトヲ得ス

第五條

兩締約國ハ輸入、輸出又ハ通過ノ禁止ニ依リテ相互ノ通商關係ヲ妨ケサルヘキコトヲ約ス  
 左記ノ場合ニ於テハ前項ノ規定ニ對シ例外ヲ設クルコトヲ得但シ別國一般ニ又ハ同一ノ條件ノ下  
 ニ在ル別國ニ對シ總テ適用セラルルモノナルコトヲ要ス

- 一 非常ノ場合ニ於テ軍需品ニ關スルトキ
- 二 公安ニ關スルトキ
- 三 公共衛生ニ關スルトキ及動物又ハ有用植物ヲ病疫又ハ寄生物ニ對シテ保護セムトスルトキ
- 四 内國商品ノ製産、販賣又ハ運搬ニ關シテ國內法ヲ以テ定メタル禁止又ハ制限ヲ同種ノ外國  
 商品ニ適用セムトスルトキ

第六條

兩締約國ノ一方ノ國民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ通過稅ノ免除、稅關庫入、輸出獎勵金、戻稅及商品  
 ノ輸出入ニ關スル便宜ニ付内國民ト全ク均等ノ待遇ヲ享受スヘシ

第七條

兩締約國ノ一方ノ官廳ヨリ發給シタル營業證明書ヲ提示シ以テ該國版圖内ニ於テ營業ニ從事スル  
 ヲ得ルコトヲ證明スル商工業者ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ本人自ラ又ハ旗商ヲ使用シテ物品ヲ買  
 入レ見本携帶又ハ不携帶ニテ注文ヲ取集ムルコトヲ得而シテ右商工業者及共ノ使用スル旗商ハ買



入ヲ爲シ又ハ注文ヲ取集ムルニ當リ課税及便益ニ關シテ最惠國待遇ヲ享受スヘレ

締約國ハ如何ナル官廳カ營業證明書發給ノ權限ヲ有スルヤヲ相互ニ通知スヘレ

第一項ニ掲グルル目的ヲ以テ見本トシテ輸入セラルル物品ハ其ノ再輸出セラルヘキコト又ハ法定期間内ニ再輸出セラレサル場合ニ成規ノ關稅ノ納付セラルヘキコトヲ確實ナラシムカ爲ニ制定セラレタル關稅法規及手續ヲ履行スルトキハ各締約國ニ於テ一時無稅輸入ヲ許可セラルヘレ但レ此ノ特權ハ物品ノ數量又ハ價額ニ徵シ見本ト認ムルコト能ハサルモノ又ハ其ノ性質上再輸出ノ際檢査合スルコト能ハサルモノニハ之ヲ與フルコトナシ見本カ無稅輸入ヲ許可セラルヘキモノタルト否トヲ決定スルハ何レノ場合ニ於テモ輸入地當該官廳ノ權内ニ專屬ス

第八條

前條ニ掲グルル見本ニ對シ其ノ輸出ノ際兩締約國ノ一方ノ稅關カ施シタル記號、極印又ハ印章ハ右見本ノ詳細ナル説明ヲ記載シ該稅關ノ公ノ查証ヲ有スル目錄ト共ニ其ノ見本品タルコトヲ證明スルモノトシテ且該目錄列記ノモノタルコトヲ確認スルカ爲ニ必要ナル外右見本ヲ檢査ヲ免レシムルモノトシテ互ニ他ノ一方ノ稅關ヨリ承認セラルヘレ但レ其ノ特ニ必要ト認ムル場合ニハ更ニ記號ヲ該見本ニ施スコトヲ得

第九條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ニ住所ヲ有スル商業又ハ金融業ニ關スル株式會社其ノ他ノ會社及組合(保險會社ヲ包含ス)ニシテ該國ノ國法ニ從ヒ法律上成立セルモノハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ法律上成立セルモノト認メラルヘク且其ノ地ノ國法ニ從ヒ原告又ハ被告トシテ裁判所ニ出頭スルコトヲ得

右會社又ハ組合カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ其ノ營業ニ從事シ又ハ財產ヲ取得シ得ルヤ否ヤハ其ノ地ノ國法ニ依リテ定マルヘク而シテ何レノ場合ニ於テモ右會社及組合ハ該版圖内ニ於テ最惠國ノ同種ノ會社及組合ニ許與セラレ又ハ許與セラルルコトアルヘキ所ト同一ノ權利ヲ享有スヘレ

第十條

兩締約國ノ一方ノ港ニ其ノ國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入セラレ又ハ輸入セラルルコトアルヘキ一切ノ物品ハ他ノ一方ノ船舶ヲ以テ亦均シク該港ニ之ヲ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ右物品ノ内國船舶ニ依リテ輸入セラルルトキ課スル所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル税金又ハ課金ハ如何ナル名稱ヲ有スルモノナリトモ之ヲ課スルコトナシ右相互均等ノ待遇ハ該物品カ直接ニ製産原地ヨリ到ルト又ハ其ノ他ノ外國ヨリ到ルトヲ問ハス之ヲ實行スヘシ

輸出ニ關シテモ右ト同様ニ全ク均等ノ待遇ヲ爲スヘク從テ締約國ノ一方ノ版圖ヨリ適法ニ輸出セラレ又ハ輸出セララルコトアルヘキ物品ハ其ノ輸出カ日本船舶ニ依ルト獨逸船舶ニ依ルトヲ問ハス且其ノ仕向先カ締約國ノ他ノ一方ノ港タルト第三國ノ港タルトニ拘ラス之カ輸出ニ當リ該版圖内ニ於テ同一ノ輸出稅ヲ納付シ又同一ノ獎勵金及戻稅ヲ受クヘシ

第十一條

締約國ノ領水内ニ於ケル船舶ノ緊留及貨物ノ積卸ニ關スル一切ノ事項ニ付テハ締約國ニ於テ兩國ノ船舶ヲ全ク均等ニ待遇スルノ意思ナルニ因リ締約國ノ孰レノ一方ナリトモ他ノ一方ノ船舶ニ對シ同様ノ場合ニ均シク許與セサル何等ノ特權又ハ便益ヲ自國船舶ニ許與スルコトナカルヘシ

第十二條

獨逸國ノ國法ニ從ヒ獨逸船舶ト認メラルル一切ノ船舶又ハ日本國ノ國法ニ從ヒ日本船舶ト認メラル



ルル一切ノ船舶ハ本條約ノ適用上相互ニ之ヲ獨逸船舶又ハ日本船舶ト認ムヘシ

第十三條

政府、官吏、私人、團體又ハ各種營造物ノ名義ヲ以テ又ハ其ノ利益ノ爲ニ課セラルル噸稅、通過稅、運河稅、港稅、水先案内料、燈臺稅、檢疫費其ノ他名稱ノ如何ニ拘ラス之ニ類似又ハ該當スル稅金又ハ課金ハ同一ノ條件ヲ以テ均シク内國船舶一般ニ又ハ最惠國船舶ニ課スルモノニ非サレハ締約國ノ一方ノ領水内ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課スルコトナシ右均等ノ待遇ハ兩國ノ船舶カ何レノ地ニ來リ又何レノ地ニ往クヲ問ハズ相互ニ之ヲ實行スヘシ

第十四條

締約國ノ一方ノ定期郵便運送ノ任務ニ當ル船舶ハ他ノ一方ノ領水内ニ於テ同様ノ最惠國船舶ニ許與セララルル便益、特權及免除ヲ享有スヘシ

第十五條

沿岸貿易ハ本條約ノ規定スル限ニ在ラス之ヲ内國船舶ニ留保ス但シ本件ニ關シ各締約國ハ他ノ一方カ別國船舶ニ許與シ又ハ許與スルコトアルヘキ所ト同一ノ權利又ハ特權ヲ自國船舶ノ爲ニ請求スルコトヲ得ルモノトス尤モ此ノ場合ニハ自國ニ於テモ他ノ一方ノ船舶ニ對シ同一ノ權利又ハ特權ヲ許與スルコトヲ要ス

左ニ掲クル場合ハ沿岸貿易ト看做サス

- 一 外國ヨリ積載シ來リタル旅客又ハ貨物ノ全部若ハ一部ヲ陸揚セムカ爲或ハ外國行ノ旅客又ハ貨物ノ全部若ハ一部ヲ積載セムカ爲一港ヨリ他港ニ航海スルコト
- 二 外國ニ於テ交付セラレ又ハ外國ヲ目的地トスル通シ切符又ハ通シ船荷證券ヲ有スル旅客又

ハ商品ヲ一港ヨリ他港ニ運送スルコト

第十六條

締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ船舶ニ對シ難破、海上損害又ハ不可抗力ニ因ル寄航ノ場合ニ於テ其ノ國有タルト私有タルトヲ問ハズ同様ノ場合ニ内國船舶ニ許與スルト同一ノ援助、救護及免除ヲ許與スヘシ右難破又ハ被害船舶ヨリ救上ケタル貨物ニ對シテハ總テ關稅ヲ免除ス但シ内國消費ノ爲引取ラルル場合ニハ成規ノ關稅ヲ納付スヘシ

地方官廳ハ成ルヘク速ニ難破又ハ損害ノ事實ヲ最近地ニ駐在スル船舶所屬國領事官ニ通知スヘシ

締約國領事官ハ自國民ニ必要ナル援助ヲ與フルコトヲ得

第十七條

本條約ニ於テ別段ノ明文アル場合ヲ除クノ外兩締約國ハ各締約國ノ通商、航海及工業ヲ總テ最惠國ノ基礎ニ置クノ意思ナルニ因リ通商、航海及工業ニ關スル一切ノ事項ニ付共ノ一方カ別國ノ船舶又ハ國民ニ現ニ許與シ又ハ今後許與スルコトアルヘキ一切ノ特權、恩典又ハ免除ハ右例外ノ場合ヲ除クノ外即時且無條件ニテ他ノ一方ノ船舶又ハ國民ニ及ホスコトニ同意ス

第十八條

本條約ノ規定ハ各締約國ノ關稅地域ニ現ニ屬シ又ハ今後屬スルコトアルヘキ國及地域ニモ均シク之ヲ適用ス

第十九條

本條約ハ本日調印ノ特別相互關稅條約ト共ニ千九百十一年七月十七日ヨリ實施シ其ノ有効期間ハ千九百二十三年七月十六日迄トス



右期間満了ノ十二月前ニ締約國ノ孰レヨリモ本條約ヲ消滅セシムルノ意思ヲ通告セサルトキハ本條約ハ締約國ノ一方カ其ノ廢棄ヲ聲明シタル日ヨリ一年ノ期間ノ満了ニ至ル迄引續キ效力ヲ有ス  
 尤モ千九百十二年三月三十一日迄ハ兩締約國ニ於テ本條約ノ廢棄ヲ聲明スルノ權能ヲ留保ス右廢棄聲明ノ場合ニハ本條約ハ千九百十二年十二月三十一日ヲ以テ其ノ效力ヲ失フヘシ締約國ハ本條約第一項ニ掲グル關稅條約ヲ同時ニ廢棄スルニ非サレハ右權能ヲ行使セサルヘキコトヲ約ス

第二十條

本條約ハ批准ヲ要ス其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交換スヘシ  
 右證據トシテ各全權委員本條約ニ署名調印ス

千九百十一年六月二十四日伯林ニ於テ本書ニ通テ作ル

珍田 拾巳 印  
 キダーレン 印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ躡メル日本國皇帝(御名)此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕明治四十四年六月二十四日伯林ニ於テ帝國全權委員カ獨逸國全權委員ト共ニ署名調印シタル日  
 獨逸商航海條約ヲ閱覽點檢シ之ヲ嘉納批准ス  
 神武天皇即位紀元二千五百七十一年明治四十四年七月十五日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐シ

御名 國璽

外務大臣 侯爵小村壽太郎

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十四年六月二十四日獨逸國伯林ニ於テ日獨兩國全權委員ノ署名調印シタル日獨特別相互關稅條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十四年七月十五日

内閣總理大臣 公卿桂 太郎  
 外務大臣 侯爵小村壽太郎

條約第十號

日獨特別相互關稅條約

日本國皇帝陛下及獨逸帝國ノ名ヲ以テスル獨逸皇帝普魯西國皇帝陛下ハ齊シク兩國間通商關係ノ發達ヲ助成セムコトヲ欲シ之カ爲ニ特別相互關稅條約ヲ締結スルコトニ決定シ日本國皇帝陛下ハ獨逸國駐劄特命全權大使從三位勳一等男爵珍田拾巳ヲ獨逸皇帝普魯西國皇帝陛下ハ外務大臣、コシセイエ、アンチーム、アクチエニアルフレッド、ファン、キダーレンウエヒトマールヲ各共ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

本條約附屬稅表甲號ニ掲グル獨逸國ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ハ日本國へ輸入セラルルニ當リ又本條約附屬稅表乙號ニ掲グル日本國ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ハ獨逸國へ輸入セラルルニ當リ其ノ何レノ地ヨリ到ルヲ問ハス右各稅表ノ定ムル所ニ依ルヘシ



第二條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ハ其ノ何レノ地ヨリ到ルヲ問ハス他ノ一方ノ版圖内ニ輸入セラルルニ當リ別國ノ製産ニ係ル同様ノ物品ニ適用セラルル最低率ノ輸入税ヲ課セラルヘシ

第三條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ正當ニ輸入セラレタルモノニ對シテハ内國ノ製産ニ係ル同様ノ物品ニ課シ又ハ課スルコトアルヘキ所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル何等ノ入市税、通過税、庫敷料又ハ消費税ヲ課スルコトナシ

第四條

兩締約國ハ製産原地證明書ヲ提出スルノ義務ヲ一般ニ免除スヘキコトニ同意ス但シ兩國ノ一方ニ於テ輸入品ニ關シ二種以上ノ關稅率アルトキハ例外トシテ製産原地證明書ノ提出ヲ求ムルコトヲ得

製産原地證明書ハ當該正式領事官之ヲ發給ス正式領事官ノ駐在セサル地ヨリ發送セラレタル商品ニ付テハ領事官ニ於テ原產國當該官廳ノ發給シタル證明書ヲ以テ右商品ノ原產地ヲ證スルモノト認ムヘシ但シ特別ノ場合ニ於テハ領事官ハ其ノ理由ヲ説明シテ更ニ立證ヲ要求スルコトヲ得ルモノトス

第五條

本條約ノ規定ハ各締約國ノ關稅地域ニ現ニ屬シ又ハ今後屬スルコトアルヘキ國及地域ニモ均シク之ヲ適用ス

第六條

本條約ノ規定ハ各締約國カ專ラ國境ノ兩側ニ於ケル一定地帯内ノ國境貿易ニ便ナラシムカ爲接境國ニ許與スル關稅上ノ殊遇、締約國ノ内國民漁業ノ產物ニ許與セラルル待遇及日本國ニ近接スル別國領水内ニ於テ捕獲採取セラレタル魚類其ノ他ノ水產物ニ關シ日本國カ許與スル關稅上ノ殊遇ニハ之ヲ適用セズ

第七條

本條約ハ本日調印ノ通商航海條約ト共ニ千九百十一年七月十七日ヨリ實施シ其ノ有効期間ハ千九百十七年十二月三十一日迄トス  
右期間滿了ノ十二月前ニ締約國ノ孰レヨリモ本條約ヲ消滅セシムルノ意思ヲ通告セサルトキハ本條約ハ締約國ノ一方カ其ノ廢棄ヲ聲明シタル日ヨリ一年ノ期間ノ滿了ニ至ル迄引續キ效力ヲ有ス尤モ千九百十二年三月三十一日迄ハ兩締約國ニ於テ本條約ノ廢棄ヲ聲明スルノ權能ヲ留保ス右廢棄聲明ノ場合ニハ本條約ハ千九百十二年十二月三十一日ヨリ以テ其ノ效力ヲ失フヘシ締約國ハ本條約ノ第一項ニ掲グル通商航海條約ヲ同時ニ廢棄スルニ非サレハ右權能ヲ行使セサルヘキコトヲ約ス

第八條

本條約ハ批准ヲ要ス其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交換スヘシ  
右證據トシテ各全權委員本條約ニ署名調印ス  
千九百十一年六月二十四日柏林ニ於テ本書ニ通ヲ作ル

珍田 拾巳 印  
キダーレン 印



附屬稅表甲號		日本國輸入稅	
關稅定率表番號	品名	單位	稅率
七二ノ内	革類		
	一 牛革、水牛革、馬革、綿羊革及山羊革		
	乙 染メタルモノ又ハ著色シタルモノ(ローブルーレザーク除ク)	從價	一割五分
	丙 其ノ他		
	一 牛革、水牛革及馬革	同	一割五分
	ハ 其ノ他		
一五七	サリチール酸	同	七〇〇
二〇九	鹽酸キニーネ及硫酸キニーネ	同	六〇〇
二三七ノ内	人造藍	同	四〇〇
	一 乾キタルモノ	同	四〇〇
二四三	アリザリン染料、アニリン染料其ノ他別號ニ掲ケサルコ	同	五六〇
	ールタル染料		
二八三ノ内	毛織絲		

一 染メサルモノ又ハ捺染セサルモノ			
丙 其ノ他			
丙ノ一 梳毛ノモノ			
イ メートル式番手三十二番ヲ超エサルモノ	每百斤	一三、二〇〇	
ロ 其ノ他	同	一三、二〇〇	
三〇一ノ内	毛織物、毛織交織物及毛又ハ毛織ト絹トノ交織物		
二 其ノ他			
乙 毛織製ノモノ			
イ 一平方メートルニ付百グラムヲ超エサルモノ	同	四四、〇〇〇	
ロ 一平方メートルニ付二百グラムヲ超エサルモノ	同	四二、〇〇〇	
三六七	包装用紙及辨寸用紙(チツレニューペーパーヲ除ク)	同	一五〇
四六七ノ内	亞鉛		
二 板			
丙 其ノ他			
ロ 其ノ他	同	一一、一〇〇	



關稅定率表 番號	品名	單位	稅率
五七七ノ内	瓦斯機關、石油機關及熱氣機關		
五	其ノ他(一箇ノ重量二千五百キログラムヲ超ニルモノ)	同	五、〇〇
	一箇ノ重量五千キログラムヲ超ニサルモノ	同	四、五〇
	一箇ノ重量五萬キログラムヲ超ニサルモノ	同	四、〇〇
	一箇ノ重量十萬キログラムヲ超ニサルモノ	同	三、五〇
	其ノ他		
五八〇ノ内	原動力機ト結合シタル發電機		
三	瓦斯機關、石油機關又ハ熱氣機關ト結合シタルモノ		
己	其ノ他(一箇ノ重量五千キログラムヲ超ニルモノ)	同	五、五〇
	一箇ノ重量一萬キログラムヲ超ニ五萬キログラムヲ超ニサルモノ	同	五、二〇
	一箇ノ重量十萬キログラムヲ超ニサルモノ	同	四、九〇
	其ノ他		
七三ノ内	木蠟(蠟ノ) 天然ノ儘ノモノ	每百基	五

附屬稅表乙號  
獨逸國輸入稅

一四三ノ内	寒天(模造魚膠、日本植物性ゼラチン、アガールアガール)		無稅
二四七ノ内	木蠟(蠟ノ) 調製シタルモノ(漂白、染色、板狀又ハ球形ノモノ等)	每百基	一〇
四〇一ノ内	人造絹絲、屑絲又ハ柞蠶絲ヲ混セス全部桑蠶絲ヲ用ヒ且兩端ニ緻密ナル縫縁ヲ有スルタフタ組織平織ノ羽二重ニシテ生、精練又ハ艶出ノモノ		
	提示見本ニ依リ目付三匁以上ノモノ	同	三〇〇
四〇五ノ内	本協定稅表第四〇一號ニ掲ケタル種類ノ羽二重ニテ製シタル手巾	同	四〇〇
	刺繡又ハレースニ屬セサル羽二重手巾ニシテ簡單ナル縁縫又ハ幾分ノ縁縫ヲ施シタルモノハ前記ノ稅率ニ五分ヲ附加ス又透シ縁縫ハ簡單ナル縁縫ト看做ス		
	右羽二重手巾ニ於テ六センチメートル平方ヲ超エサル表面ニ刺繡ヲ施シタルモノハ刺繡シタルモノト看做サス		
五八七	經木真田(染メタルモノヲ含ム)	每百基	麻克一
五八八ノ内	麥稈真田		
	漂白セサルモノ、染メサルモノ		
	漂白シタルモノ、染メタルモノ	每百基	無稅六



五八九ノ内	花籃	粗ナルモノ(生又ハ染メタルモノ、色留シタルモノ又ハ漆塗ノモノ)	同	三
		其ノ他	同	二
六〇六ノ内	鈕釦	日本漆ヲ塗リタル精巧木製品(杖ヲ除ク)他ノ材料ト結合スルモ之カ爲高稅ヲ課セラレサルモノナルニ於テハ之ヲ含ム	同	一五〇
六三二ノ内		日本漆ヲ塗リタル紙製品又ハ板紙製品	同	二〇〇
六七〇ノ内		銅又ハ鍍タル眞鍮製品ニシテ日本漆ヲ塗リタルモノ(稅表第八七四號、第八七九號若ハ第八八七號中ニ含まレサルモノ又ハ他ノ材料ト結合スルモ之カ爲高稅ヲ課セラレサルモノニ限ル)	同	二二五
八七八ノ内				

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル日本國皇帝(御名)此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕明治四十四年六月二十四日伯林ニ於テ帝國全權委員カ獨逸國全權委員ト共ニ署名調印シタル日獨特別相互關稅條約ヲ閱覽點檢シ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百七十一年明治四十四年七月十五日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ冠ヲ鈐セシム

御名 國 璽

外務大臣 侯爵小村壽太郎

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十四年八月十九日巴里ニ於テ日佛兩國委員ノ署名調印シタル日佛通商關係ニ關スル暫定協約ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十四年八月二十六日

内閣總理大臣 公爵桂 太郎

外務大臣 侯爵小村壽太郎

條約第十一號

日佛通商關係ニ關スル暫定協約

日本國政府及佛蘭西國政府ハ日本國又ハ佛蘭西國ニ輸入セララルル佛蘭西國商品又ハ日本國商品ニ對シ千九百十一年九月一日ヨリ附屬稅表甲號又ハ乙號ニ記載スル稅率ヲ假ニ適用スヘキコトヲ約定ス右適用ハ本日調印ノ兩國間通商航海條約カ千九百十二年一月一日以前ニ實施セラレサル場合ニハ同日迄繼續スルモノトス

兩國政府ハ又前記ノ期間通商工業、航海及關稅ニ關スル一切ノ事項ニ付相互ニ最惠國待遇ヲ許與スヘキコトヲ約定ス

右證據トシテ下名ノ佛蘭西國駐劄日本國特命全權大使男爵栗野慎一郎、佛蘭西共和國外務大臣元老院議員シ、ド、セルヴ、佛蘭西共和國大藏大臣代議院議員エル、エル、クロツツ及佛蘭西共和國商工務大臣元老院議員シャルル、クイバハ各共ノ政府ノ委任ヲ受ケ本協約ニ署名調印ス



千九百一十二年八月十九日巴里ニ於テ本書ニ通テ作ル

栗野慎一郎  
ジ、ド、セルツ  
エル、エル、ク、ロツツ  
シャルル、グイバ

附屬稅表甲號

日本國輸入稅

日本國關稅  
定率表番號

名

單位

品  
品ニ適用スル  
稅率ハ日本國  
關稅定率ニ  
準テ算ス

上關稅額ノ百  
分ニ依リ算  
出セル稅額  
關稅定率  
ニ準テ算ス

五二ノ内 二、乙、イ、鹽油漬

五三ノ内 天然バター

六四ノ内 葡萄ノ天然醱酵ニ依リテノミ釀造セル非沸騰性各  
種葡萄酒  
但シ攝氏十五度ニ於テ〇、七九四七ノ比重ヲ有  
スルモノヲ純酒精トシ原容量百分中純酒精ノ容  
量十四ヲ超エサルモノ

甲 繰入ノモノ

從價

九二二

二七〇〇

乙 樽入ノモノ

但シ攝氏十五度ニ於テ百立方センチメートル  
ル中ニ於ケル糖分ヲ葡萄酒トシテ計算セタ  
ル重量一グラムヲ超エサルモノ  
ジエルモット

同

三三三

五〇〇

但シ攝氏十五度ニ於テ〇、七九四七ノ比重ヲ有  
スルモノヲ純酒精トシ原容量百分中純酒精ノ容  
量十四ヲ超エ二十四ヲ超エサルモノ

甲 繰入ノモノ

同

五〇〇

二〇〇〇

乙 樽入ノモノ

但シ攝氏十五度ニ於テ百立方センチメー  
トル中ニ於ケル糖分ヲ葡萄酒トシテ計算  
セタル重量二十グラムヲ超エサルモノハ  
二十グラム以上一グラムヲ増ス毎二百リ  
ツトルニ付二十五錢ヲ加フ

六五 シャンパン共ノ他ノスパークリングワイン  
九八ノ内 阿列布油

同

三七五

三七五〇

二 共ノ他(繰入又ハ樽入ノモノ以外ノモノ)

每百斤  
容器共

六三二

六〇〇



一一七	石鹼	一 薰香ヲ付シタルモノ 二 其ノ他	每百斤 内裝共	六二九 五〇九	一八〇〇 二九〇
一一八	薰香ヲ付シタル油脂蠟及其ノ製品		每百斤 内容共	四四九	三五〇〇
一一九	香水	一 薰香ヲ付シタルツリネガ 二 其ノ他	同	三三三	三〇〇〇
一二二	齒磨粉、齒洗藥、化粧粉其ノ他別號ニ掲ケサル調製 薰香類		同	五五六	五〇〇〇
二八三ノ内	毛織絲	一 染メサルモノ又ハ捺染セサルモノ 丙 其ノ他(梳毛絲ト紡毛絲トヲ混合セタル モノ)番手ノ異リタル絲ヲ混合セタル ノ及輪絲(以外ノモノ) 丙ノ一 梳毛ノモノ イ メートル式番手三十 ニ番ヲ超エサルモノ ロ 其ノ他	同	一〇〇〇 七五四	一三二一〇 一三二一〇

三〇一ノ内	毛織物、毛綿交織物及毛又ハ毛綿ト絹トノ交織物	二 其ノ他(天鵝絨、フロッシ、其ノ他ノパイル 織物(パイルヲ切リタルト否トヲ別メス) 以外ノモノ) 甲 毛製ノモノ イ 一平方メートルニ付百グラムヲ超エサ ルモノ	同	七五〇	四三、一〇
五三三	雙眼鏡及隻眼鏡	一 プリズムヲ用井タルモノ 二 其ノ他	每斤	六六七 八三三	一〇〇〇〇 二二五〇
五六三	自動車		同	七〇〇	三割五分
五六四	原動力機ヲ除キタル自動車部分品		同	八三三	二割五分
六〇〇ノ内	メリヤス機械	一 一箇ノ重量五百キログラムヲ超エサルモノ	每百斤	五〇〇	一一、〇〇
附屬稅表乙號 佛蘭西國輸入稅 佛蘭西國關稅 定率表番號 四五九ノ内 羽二重其ノ他之ニ類似ノ織物					
	名	單位	稅率	最輕稅率	最重稅率
	百基	百基	六〇〇	六〇〇	六〇〇



精練シタルモノ但シ漂白セサルモノ、染メサルモノ、塗ラサルモノ又ハ捺染セサルモノ

羽二重製手巾ニ對スル稅率ハ稅番第四六〇號ノ最低稅率トス

日本漆ヲ塗リタル木製品ニ對スル稅率ハ他ノ材料ト結合セ

ル爲高稅ヲ課セラルル場合ヲ除クノ外其ノ種類ニ依リ稅番

第五九一號第五九二號ノ乙、第五九三號又ハ第六四一號ノ

乙ノ最低稅率トス

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十四年六月一日東京ニ於テ日露兩國全權委員ノ署名圖印シタル逃亡犯罪人引渡條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十四年九月十五日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
外務大臣 伯爵林 董  
司法大臣 松田正久

條約第十二號 (官報 九月十六日)

逃亡犯罪人引渡條約

日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下ハ逃亡犯罪人ノ引渡ニ關スル條約ヲ締結スルコトニ決定シ日本國皇帝陛下ハ外務大臣正三位勳一等侯爵小村壽太郎ヲ全露西亞國皇帝陛下ハ日本國駐劄特命全權大使「メートル、ド、ラ、クロール」セナトウルニシテ、マレウスキー、マレウイッチヲ其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

締約國ノ一方ノ法權内ニ於テ第二條ニ規定セル犯罪アリタルカ爲刑事被告人ト爲リ又ハ有罪ノ判決ヲ受ケタル者他ノ一方ノ版圖内ニ於テ發見セラレタルトキハ兩締約國ハ本條約ニ規定セル事由、條件及制限ニ從ヒ互ニ之ヲ引渡スコトヲ約ス



第二條

引渡請求ノ原因タル犯罪カ締結國雙方ノ法律ニ依リ長期一年ヲ超ニル禁錮懲役以上ノ刑ニ該ルモ  
ノナルトキハ犯罪人ノ引渡ヲ爲ス但シ右ノ犯罪ニ付有罪ノ判決ヲ受ケタル者ニ在リテハ引渡請求  
國ニ於テ言渡シタル刑カ一年ノ禁錮懲役以上ナルトキニ限ル

第三條

締結國ハ互ニ自國ノ臣民及刑事司法一切ノ關係ニ於テ自國ノ臣民ト向視スル者ヲ引渡スノ義務ナ  
シ

第四條

逃亡犯罪人引渡請求ノ原因タル行為カ政治上ノ性質ヲ有スル犯罪ナルトキハ其ノ引渡ヲ爲サズ但  
シ君主又ハ皇族ノ身體又ハ名譽ニ對スル行為ハ政治上ノ性質ヲ有スル犯罪ト認メス  
前項ノ場合ニ該當スルト否トニ付疑アルトキハ被請求國官憲ノ決定ヲ以テ最終トス

第五條

左ノ場合ニ於テハ逃亡犯罪人ノ引渡ヲ爲サズ

- 一 被請求國ニ於テ引渡請求ノ原因タル犯罪ニ付審判ヲ經テ處罰若ハ釋放セラレタルトキ又ハ  
審判中ナルトキ
- 二 引渡ノ請求ヲ受クルニ先チ締結國ノ孰レカ一方ノ法令ニ依リ公訴又ハ刑ノ時効カ完成レタ  
ルトキ

第六條

締結國ノ一方ヨリ引渡ノ請求アリタル者引渡請求ノ原因タル行為ト異ナル行為ニ付他ノ一方ノ版

國內ニ於テ審判中ナルトキ又ハ刑ノ言渡アリタルトキハ法令ノ定キル所ニ從ヒ刑ノ執行ヲ受クル  
コトナキニ至リタル後ニ非サレハ其ノ引渡ヲ爲サズ

第七條

締結國ノ一方ヨリ引渡ノ請求アリタル者ニ付別國ヨリ條約ノ規定ニ基キ引渡ノ請求アリタルトキ  
ハ被請求國ノ引渡ニ關スル法令ニ依リ最先ノ順位ニ在ル國ニ引渡ヲ爲スヘシ

第八條

犯罪人引渡ノ請求ハ外交機關ヲ經テ之ヲ爲ス

- 一 刑事被告人ニ付テハ
  - イ 當該官憲ノ發シタル逮捕狀又ハ其ノ公正證書
  - ロ 引渡請求ノ原因タル犯罪アリタルコトヲ認ムルニ足ルヘキ書類又ハ其ノ公正證書
  - ハ 適用スヘキ法令ノ條文
- 二 有罪ノ判決ヲ受ケタル者ニ付テハ判決書又ハ其ノ公正證書

被請求國ハ引渡ニ先チ請求國ニ對シ前項ノ書類ヲ補充スヘキ書類及情報ヲ求ムルコトヲ得

第九條

引渡ニ關スル手續ハ被請求國ニ於ケル現行ノ法令ニ依ル

第十條

緊急ノ場合ニ於テハ本條約ニ依リ引渡ノ請求ニ先チ外交機關ヲ經テ逃亡犯罪人ノ假逮捕ヲ求ムル  
コトヲ得假逮捕ノ請求ニハ本人ノ犯罪ノ性質ヲ示シ逮捕狀ノ既ニ發セラレタルコトヲ通告シ且相



當ノ期間内ニ本條約ノ規定ニ依リ引渡ノ請求ヲ爲スヘキコトヲ約スヘシ  
假逮捕ノ日ヨリ六十日内ニ本條約ノ規定ニ依リ引渡ノ請求ナキトキハ其ノ逃亡犯罪人ハ之ヲ釋放  
スヘシ

第十一條

本條約ニ依リ引渡サレタル者ハ引渡請求ノ原因タル行爲ト異ナル引渡以前ノ行爲ニ付引渡ヲ受ケ  
タル國ニ於テ訴追若ハ處罰セラレ又ハ其ノ國ヨリ第三國ニ引渡サルルコトナカルヘシ但シ左ノ場  
合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

- 一 犯罪カ本條約ニ依リ引渡ノ原因タルヘキモノニシテ引渡國カ訴追及處罰又ハ第三國ヘノ引  
渡ニ同意シタルトキ
- 二 引渡サレタル者カ引渡ヲ受ケタル國ノ版圖ヲ去ルノ自由ヲ得タル後一月内ニ去ラザルトキ

第十二條

引渡サルヘキ者カ引渡請求ノ原因タル犯罪ニ因テ取得セシ物件又ハ其ノ犯罪ノ證據ニ供セラルヘ  
キ物件ニシテ差押ヘラレタルモノハ引渡國ノ當該官憲ニ於テ之カ交付ヲ相當ト認ムルトキハ引渡  
請求國ノ請求ニ因リ身柄ト共ニ之ヲ交付スヘシ但シ其ノ物件ニ關スル第三者ノ權利ハ相當ニ尊重  
セラルヘシ

第十三條

前項ノ物件ハ刑事被告人又ハ有罪ノ判決ヲ受ケタル者ノ死亡又ハ逃走ニ因リ其ノ既ニ決定アリ  
ル引渡ヲ實行スルコト能ハサル場合ニ於テモ亦之ヲ交付スヘシ

締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ請求アリタルトキハ右他ノ一方カ第三國ヨリ引渡ヲ受ケタル犯罪人ノ

版圖内通過ヲ許スヘシ但シ其ノ請求ヲ受ケタル國ニ於テ自國ノ版圖内ニ該犯罪人カ發見セラレ  
ルトセハ本條約ニ依リ其ノ引渡ヲ爲スコトヲ要スヘキ場合ニ限ル

通過ノ請求ハ外交機關ヲ經テ之ヲ爲ス其ノ請求書ニハ前項但書ノ要件ヲ具備セルコトヲ宣明スヘ  
ク且第三國ヨリ引渡ヲ爲スニ付發シタル引渡狀ノ公正謄本ヲ添附スヘシ

第十四條

通過中ノ犯罪人ハ通過國官吏ノ管束ニ屬ス

第十五條

引渡及通過ニ關スル一切ノ費用ハ請求國ノ負擔トス

本條約ハ批准書交換後二月ヲ經テ實施セララルヘシ兩締約國ノ一方ハ少クトモ六月以前ノ豫告ニ因  
リ之ヲ廢棄スルコトヲ得

本條約ハ之ヲ批准シ其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ聖彼得堡ニ於テ交換セララルヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名調印ス  
明治四十四年六月一日即露曆千九百一十一年五月十九日(六月一日)東京ニ於テ本書ニ通テ作ル

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル日本國皇帝(御名)此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス  
朕明治四十四年六月一日東京ニ於テ帝國全權委員カ露西亞國全權委員ト共ニ署名調印シタル日露  
逃亡犯罪人引渡條約ヲ閱覽照檢シ之ヲ嘉納批准ス



神武天皇即位紀元二千五百七十二年明治四十四年七月十一日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ譽レ置ヲ鈴

御名 國璽

外務大臣 侯爵小村壽太郎

附屬宣言書

本日日本國露西亞國間逃亡犯罪人引渡條約ノ調印ヲ爲スニ當リ下名ノ全權委員ハ左ノ宣言ヲ協定

- 一 前記逃亡犯罪人引渡條約中版圖トアルハ締約國ノ主權又ハ專屬的管治ノ下ニ在ル地域ヲ謂
- 二 前記條約ニ於テ刑事被告人トアルハ裁判權ヲ行フ範圍ヲ謂フ
- 三 此ノ宣言ハ之ヲ以テ補充セル逃亡犯罪人引渡條約ト效力、價值及存續期間ヲ同クシ右條約ノ批准セラレタルトキハ此ノ宣言ハ別ニ正式ノ批准ヲ要セスレテ亦均ク承認セラレタルモノト看做サルヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ本宣言書ニ署名調印ス

明治四十四年六月一日即舊曆一千九百一十一年五月十九日(六月一日)東京ニ於テ本書ニ通テ作ル  
小 村 壽 太 郎 印  
ニコラ、マレウスキー、マレウイフテ印

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ亞米利加合衆國華盛頓ニ於テ帝國外三國全權委員ノ署名調印シタル照會  
獸保護條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十四年十二月十四日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
外務大臣 子爵内田康哉

條約第十三號(宣稱十二月十五日)

亞米利加合衆國、大不列顛愛爾蘭聯合王國大不列顛海外領土皇帝印度皇帝陛下、日本國皇帝陛下及全  
露西亞國皇帝陛下ハ北太平洋ノ洋海ニ來集スル臘臘獸ノ保存及保護ノ爲有效ナル手段ヲ採ラムコ  
トヲ欲シ之カ爲ニ條約ヲ締結スルコトニ決定シ  
亞米利加合衆國大統領ハ合衆國商務卿チャールズ、ネーゲル及國務省參事官チャンドラー、ビー、ア  
ンダーソンヲ  
大不列顛國皇帝陛下ハ其ノ亞米利加合衆國駐劄特命全權大使、ゼ、オーダー、オフ、メリット、ゼ、フイ、ト、  
オノラブル、ジエームス、ブライニス及加奈陀外事次官、コンマンダー、オフ、ロイヤル、ツイクトリアン、  
オーダー、エンド、コンパニオン、オフ、ゼ、オーダー、オフ、セント、マイケル、エンド、セント、ジョージ、  
シヨセフ、ポープロ  
日本國皇帝陛下ハ其ノ亞米利加合衆國駐劄特命全權大使從三位勳一等男爵内田康哉及農商務省水  
産局長正四位勳三等道家齊ヲ



全露西亞國皇帝陛下ハ其ノ摩洛哥國駐節特命全權公使「チャンパレイン、オフ、ヒズ、マジュヌチース、コート」ビエール、ポットキン及外務省員男爵ボリス、ノールドヲ  
各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル  
後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

各締約國ハ相互ニ左ノ事項ヲ約ス

各締約國ノ人民又ハ臣民及凡テ其ノ法令條約ニ服従スヘキ者並其ノ船舶カ本條約ノ有效期間白  
令海勸察加海、オコツク海及日本海ヲ包含スル北緯三十度以北ノ北太平洋ノ洋海ニ於テ臚轔獸  
ノ海上獵獲ヲ爲スヲ禁止スヘキコト

右ノ禁止ヲ犯シタル者及船舶ハ各締約國ノ海軍將校其ノ他相當ノ權限アル官吏ニ於テ之ヲ拿捕  
抑留スルヲ得ルコト但シ拿捕ハ他ノ締約國ノ領海内ニ非サル場合ニ限ル

拿捕抑留セラレタル者又ハ船舶ハ成ルヘク速ニ拿捕地最近ノ地點其ノ他互ニ協定スルコトアル  
ヘキ場所ニ於ケル其ノ所屬國ノ當該官吏ニ引渡スヘキコト

右ノ犯罪ヲ審判シ之ニ刑罰ヲ科スルノ權ハ獨リ犯罪者又ハ船舶ノ所屬國官憲ノミ之ヲ有スルコ  
ト

右犯罪立證ノ爲必要ナル證人及證據ニシテ苟モ締約國ノ宰領内ニアルモノハ成ルヘク速ニ其ノ  
犯罪審判ノ管轄權ヲ有スル當該官憲ニ之ヲ提供スヘキコト

第二條

各締約國ハ自國ニ於ケル何レノ港灣タルト其ノ領土内ニ於ケル何レノ場所タルト問ハス第一條

ニ掲クル保護區域内ノ洋海ニ於ケル臚轔獸海上獵獲ノ作業ニ關聯スル目的ノ爲何人ニモ又如何ナ  
ル船舶ニモ之ヲ使用セシメサルコトヲ約ス

第三條

各締約國ハ第一條ニ掲クル保護區域内ノ北太平洋ノ洋海ニ於テ獲取セラレタル臚轔獸皮及獸群ノ  
蕃殖地ヲ領有スル締約國各自ノ權内ニ於テ獲取セラレ官ニテ記號ヲ附シ其ノ旨ヲ證明シタルモノ  
ヲ除クノ外米、露若ハ日本ノ獸群ニ屬シ「カロールヒュス、アラスカヌス」カロールヒュス、ウルヒュス若  
ハ「カロールヒュス、クリレンヒュス」ト稱スル種族ト看做サレタル臚轔獸皮ハ何レノ締約國ノ版圖内ニ  
モ之ヲ輸入又ハ移致セシメサルコトヲ約ス

第四條

各締約國ハ第一條ニ掲クル洋海ノ沿岸ニ棲息スル印甸人、「アイノ」人「アリユート」人其ノ他ノ土人  
カ他船ヲ以テ運搬セラレ又ハ他船ト相關聯レテ使用セラレサル「カヌー」艇ニシテ專ラ機權ノ類又  
ハ帆ヲ用井テ推進シ一隻ノ乗員五人ヲ超過セサルモノニ依リ從來慣行ノ方法ニ從ヒ銃器ヲ使用ス  
ルコトナクシテ臚轔獸ノ海上獵獲ヲ行フ場合ニ付本條約ノ規定ヲ適用セサルコトヲ約ス但シ右ハ  
該土人カ他人ニ使用セラレヌ又其ノ獲取レタル獸皮ヲ他人ニ引渡スノ契約ヲ爲ササル場合ニ限ル

第五條

各締約國ハ其ノ人民若ハ臣民又ハ船舶ニ對シ本條約第一條ニ掲クル洋海ノ何レノ部分タルヲ問ハ  
ス其ノ領土ノ海岸線ヨリニ海里外ニ於テ臘虎ノ獵殺捕獲又ハ追躡ヲ許ササルコトヲ約ス

第六條

各締約國ハ前數條ノ規定ヲ有效ナラシムルニ必要ナル法令ヲ制定施行シ且其ノ違反ニ對スル相當  
ノ罰則ヲ付スヘキコトヲ約ス



第七條

合衆國、日本國及露西亞國ハ保護ニ付特ニ利害關係ヲ有スル 臘脂獸群ノ來集スル洋海ニ於テ前數  
條ノ規定ヲ實施スルニ必要ナル限リ各自警備又ハ巡邏ノ設備ヲ爲スヘキコトヲ約ス

第八條

各締約國ハ第一條ニ掲グル禁獵區域内ニ於ケル 臘脂獸ノ海上獵獲ヲ防止スル爲適當ニシテ且有用  
ナル措置ヲ執ルニ付相互ニ協力スヘキコトヲ約ス

第九條

本條約ニ於テ海上獵獲ト稱スルハ如何ナル方法ヲ以テスルヲ問ハス海上ニ於テ 臘脂獸ノ獵獲捕  
獲又ハ追跡ヲ爲スヲ謂フ

第十條

合衆國ハ「プリビロフ」島又ハ第一條ニ掲グル洋海ニ在リ將來 臘脂獸群ノ來集スルコトアルヘキ同  
國所屬ノ他ノ島嶼及海岸ニ於テ同國ノ權内ニ於テ年々獵取スル 臘脂獸皮ノ總數中數量及價格ノ孰  
レヨリスルモ之カ百分ノ十五ニ相當スルモノヲ加奈陀政府ノ公認代表者ニ、同上總數及價格ノ  
百分ノ十五ニ相當スルモノヲ日本國政府ノ公認代表者ニ、每獵季ノ終ニ「プリビロフ」島ニ於テ引渡  
スヘキコトヲ約ス但シ此ノ規定ハ合衆國カ何時ニテモ其ノ管轄内ニ在リテ 臘脂獸群ノ保護保存又  
ハ蕃殖ニ必要ナリト認ムル島嶼又ハ海岸ニ於テ 臘脂獸皮ヲ獵取スルコトヲ全然停止スルノ權利竝  
何レノ獵季ヲ問ハス獸皮ノ獵取數及獵獲ノ方法時期場所ニ關シ 臘脂獸群ノ保護保存又ハ蕃殖ニ必要ナ  
リト認ムル制限及規定ヲ設クルノ權利ニ對シ何等ノ拘束ヲ加フルモノニ非ス

第十一條

合衆國ハ日英兩國カ本條約ノ規定ニ依リ各自受領ノ權利ヲ有スル 臘脂獸皮ノ各二十萬弗ニ相當ス  
ヘキ數量ニ代ヘテ前拂金トシテ本條約實施ノ際大不列顛國ニ二十萬弗日本國ニ二十萬弗ヲ支拂フ  
ヘキコトヲ約ス而シテ獸皮ハ前拂ノ報償トシテ合衆國之ヲ保留スヘキ右ノ計算ハ獸皮ノ引渡ヲナ  
スヘキ際ニ於ケル未精製品ノ倫敦市價（「プリビロフ」島ヨリノ運賃ヲ引去ル）ニ基キ之ヲ爲スヘキ  
若シ該市價ニ付爭議ヲ生シタルトキハ其ノ場合ノ如何ニ依リ或ハ合衆國ト大不列顛國ト或ハ合衆  
國ト日本國トノ間ニ協定スル審判官之ヲ決定スヘキモノトス  
合衆國ハ其ノ獸群ヨリ獵取シタル獸皮中本條約ノ規定ニ依リ大不列顛國及日本國ノ各自受領スヘ  
キ配分額カ毎年一千枚ヲ下ラサルヘキコトヲ約ス此ノ數量カ其ノ年ニ於ケル公定獵獲數ノ百分ノ  
十五ヲ超過スル場合ト雖亦同シ但シ合衆國カ島嶼ニ棲息スル土人ノ衣食用又ハ船用ノ外如何ナル  
目的タルヲ問ハス 臘脂獸ノ獵獲ヲ絕對ニ禁止シタル年ニ於テハ此ノ限ニ在ラス此ノ場合ニ於テハ  
合衆國ハ其ノ禁獵年間獸皮ノ配分ニ代ヘテ大不列顛國及日本國ニ對シ年々各一萬弗ヲ支拂フヘキ  
コトヲ約ス而シテ大不列顛國及日本國ハ獵獲再始後兩國各自ノ受領額ヨリ前項ノ規定ニ依リ前拂  
金回收ノ爲合衆國カ保留スヘキ獸皮ヲ引去リタル後尙右兩國ノ受領額カ各特定ノ最小限タル一千  
枚ヲ超過シタル年ニ於テハ合衆國カ該超過獸皮ヲ更ニ保留シテ本項ニ規定スル支拂金ノ回收ニ充  
當スルノ權利ヲ有スルコトニ同意ス但シ右更ニ保留スヘキ獸皮ノ數量ハ其ノ前項規定ノ市價ニ基  
キテ算出セラレタル金額カ右支拂金ノ總額ニ四分ノ利子ヲ加ヘタルモノニ相當スルヲ限度トス  
然レトモ合衆國島嶼ニ來集スル 臘脂獸ノ總數カ官ノ調査上十萬頭以內ニ下リタル年ニ於テハ 臘脂  
獸ノ獵獲ハ其ノ數カ官ノ調査上再ヒ十萬頭ヲ超過スルニ至ル迄獸皮ノ配分又ハ之ニ相當スル金額  
ノ支拂ヲ爲スコトナクシテ前記土人ノ生計ニ必要ナル少量ノ供給ヲ除クノ外一切之ヲ停止スルコ  
トヲ得



第十二條

露西亞國ハ「コンマンダ」島又ハ第一條ニ掲グル洋海ニ在リ將來臘脂獸群ノ來集スルコトアルヘキ同國所屬ノ他ノ島嶼及海岸ニ於テ年々獲取スル臘脂獸皮ノ總數中數量及價格ノ孰レヨリスルモ之カ百分ノ十五ニ相當スルモノヲ加奈陀政府ノ公認代表者ニ同上總數及價格ノ百分ノ十五ニ相當スルモノヲ日本國政府ノ公認代表者ニ每獵季ノ終ニ「コンマンダ」島ニ於テ引渡スヘキコトヲ約ス但シ此ノ規定ハ露西亞國カ本條約期間ノ最初ノ五年間何時ニテモ其ノ管轄内ニ在リテ臘脂獸群ノ保存保護又ハ蕃殖ニ必要ナリト認ムル島嶼又ハ海岸ニ於テ臘脂獸皮ヲ獲取スルコトヲ全然停止スルノ權利竝本條約ノ有效期間何レノ獵季ヲ問ハス獸皮ノ獲取數及臘脂ノ方法時期場所ニ關シ獸群ノ保存保護又ハ蕃殖ニ必要ナリト認ムル制限及規定ヲ設クルノ權利ニ對シ何等ノ拘束ヲ加フルモノニ非ス尤モ露西亞國ハ本條約期間ノ最後ノ十年間年々其ノ臘脂獸蕃殖地及集合地ニ於ケル臘脂獸總數ノ百分ノ五ヲ下ラサル數ヲ獵殺スヘキコトヲ約ス但シ右ハ上記百分ノ五カ共ノ年ニ上陸スル三歳ノ牡獸ノ百分ノ八十五ヲ超過セサル場合ニ限ル

然レトモ露西亞國島嶼ニ來集スル臘脂獸ノ總數カ官ノ調査上一萬八千頭以内ニ下リタル年ニ於テハ其ノ數カ官ノ調査上再ヒ一萬八千頭ヲ超過スルニ至ル迄前掲獸皮ノ配分ヲ爲サス且島嶼ニ棲息スル土人ノ生計ニ必要ナルモノヲ除クノ外一切ノ臘脂獸ノ獵殺ヲ停止スルコトヲ得

第十三條

日本國ハ海狗島又ハ第一條ニ掲グル洋海ニ在リ將來臘脂獸群ノ來集スルコトアルヘキ同國所屬ノ他ノ島嶼及海岸ニ於テ年々獲取スル臘脂獸皮ノ總數中數量及價格ノ孰レヨリスルモ之カ百分ノ十五ニ相當スルモノヲ合衆國政府ノ公認代表者ニ同上總數及價格ノ百分ノ十五ニ相當スルモノヲ加

奈陀政府ノ公認代表者ニ又同上總數及價格ノ百分ノ十二ニ相當スルモノヲ露西亞國政府ノ公認代表者ニ每獵季ノ終ニ海狗島ニ於テ引渡スヘキコトヲ約ス但シ此ノ規定ハ日本國カ本條約期間ノ最初ノ五年間何時ニテモ其ノ管轄内ニ在リテ臘脂獸群ノ保存保護又ハ蕃殖ニ必要ナリト認ムル島嶼又ハ海岸ニ於テ臘脂獸皮ヲ獲取スルコトヲ全然停止スルノ權利竝本條約ノ有效期間何レノ獵季ヲ問ハス獸皮ノ獲取數及臘脂ノ方法時期場所ニ關シ獸群ノ保存保護又ハ蕃殖ニ必要ナリト認ムル制限及規定ヲ設クルノ權利ニ對シ何等ノ拘束ヲ加フルモノニ非ス尤モ日本國ハ本條約期間ノ最後ノ十年間年々其ノ臘脂獸蕃殖地及集合地ニ於ケル臘脂獸總數ノ百分ノ五ヲ下ラサル數ヲ獵殺スヘキコトヲ約ス但シ右ハ上記百分ノ五カ共ノ年ニ上陸スル三歳ノ牡獸ノ百分ノ八十五ヲ超過セサル場合ニ限ル

然レトモ日本國島嶼ニ來集スル臘脂獸ノ總數カ官ノ調査上六千五百頭以内ニ下リタル年ニ於テハ其ノ數カ官ノ調査上再ヒ六千五百頭ヲ超過スルニ至ル迄前掲獸皮ノ配分ヲ爲サス且島嶼ニ棲息スル土人ノ生計ニ必要ナルモノヲ除クノ外一切ノ臘脂獸ノ獵殺ヲ停止スルコトヲ得

第十四條

大不列顛國ハ第一條ニ掲グル洋海ニ在ル同國所屬ノ島嶼及海岸ニ將來臘脂獸群ノ來集スルコトアル場合ニ於テハ本條約期間右獸群ヨリ年々獲取スル臘脂獸皮ノ總數中數量及價格ノ孰レヨリスルモ之カ百分ノ十二ニ相當スルモノヲ合衆國政府ノ公認代表者ニ同上總數及價格ノ百分ノ十二ニ相當スルモノヲ日本國政府ノ公認代表者ニ又同上總數及價格ノ百分ノ十二ニ相當スルモノヲ露西亞國政府ノ公認代表者ニ每獵季ノ終ニ引渡スヘキコトヲ約ス



第十五條

合衆國及大不列顛國ハ千九百十一年二月七日兩國間ニ締結シタル臘肺獸ニ關スル條約ノ規定ニレテ本條約ノ規定ト抵觸又ハ重複スル部分ニ付テハ本條約ノ規定ヲ以テ之ニ代フヘキコトヲ約ス

第十六條

本條約ハ千九百十一年十二月十五日ヨリ之ヲ實施シ同日ヨリ十五年間及其ノ後締約國中ノ或者ヨリ爾餘ノ締約國ニ對シ爲シタル十二月前ノ書面通告ヲ以テ廢棄セラルル迄引續キ效力ヲ有ス右ノ通告ハ十四年ヲ經過シタルトキ又ハ其ノ後何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得又本條約終了前何時ニテモ締約國中ノ一國ヨリ請求アルトキハ各締約國ハ直ニ代表者ヲ會合セシメ本條約ノ期間延長及若シ必要アラハ之ト共ニ追加修正ヲ協議シ成ルヘク之ニ同意スヘキコトヲ約ス

第十七條

本條約ハ亞米利加合衆國大統領(元老院ノ協贊ヲ經テ)、大不列顛國皇帝陛下、日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下ニ於テ批准セラルヘク批准書ハ成ルヘク速ニ華盛頓ニ於テ之ヲ交換スヘク右證據トシテ各全權委員本條約四通ニ署名調印ス

明治四十四年七月七日即西曆千九百十一年七月七日華盛頓ニ於テ

チャールズ、ネーゲル 印  
チャンドラー、ビー、ブレンダーソン 印  
シェー、ムス、ブライース 印  
ジョセフ、ボニー 印  
内 田 康 哉 印

御名 國璽

外務大臣 子爵内田康哉

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル日本國皇帝(御名)此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス  
朕明治四十四年七月七日亞米利加合衆國華盛頓ニ於テ帝國外三國全權委員ノ署名調印シタル臘肺獸保護條約ヲ閱覽點檢シ之ヲ嘉納批准ス  
神武天皇即位紀元二千五百七十七年明治四十四年十一月六日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ覆ヲ鈐セシム

道 家 齊 印  
ビー、ポット、ヤン 印

御名 御璽

明治四十四年十二月二十日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望  
外務大臣 子爵内田康哉

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十四年六月二十一日瑞西國(ベルヌ)ニ於テ日本瑞西兩國全權委員ノ署名調印シタル日本瑞西間居住通商條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

條約第十四號(宣報十二月二十一日)

日本瑞西間居住通商條約

日本國皇帝陛下及瑞西聯邦政府ハ幸ニ其ノ間及其ノ國民間ニ存在スル友好親善ノ關係ヲ鞏固ナラ



シメムコトヲ欲シ之カ爲ニ居住通商條約ヲ締結スルコトニ決定シ日本國皇帝陛下ハ瑞西國駐節特命全權公使正四位勳二等秋月左都夫ヲ瑞西聯邦政府ハ政府員商工農務省長官「ドクトル」アドルフ、ドイハーヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ之カ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

兩締約國ノ一方ノ國民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ到リ旅行シ又ハ居住スルコトニ付完全ナル自由ヲ有スヘク而シテ其ノ國法ニ遵由スルニ於テハ

- 一 旅行及住居ニ關スル一切ノ事項ニ付總テ内國民ト同一ノ基礎ニ置カルヘク
- 二 商業及製造業ヲ營ミ又自ラ行フト代理人ニ由ルトヲ問ハス且單獨ニテ行フト外國人或ハ内國民トノ組合ヲ以テスルトニ論ナク適法ナル商業ノ目的物タル各種商品ヲ取扱フコトニ付内國民ト同等ノ權利ヲ享有スヘク
- 三 産業生業職業並修學及學術上ノ研究ヲ行フトニ關スル一切ノ事項ニ付最惠國ノ國民ト同一ノ基礎ニ置カルヘク
- 四 内國民ト同一ノ方法ヲ以テ必要ナル家屋製造所倉庫店舖及附屬構造物ヲ所有又ハ賃借シテ之ヲ使用シ又住居商業産業其ノ他適法ナル目的ノ爲土地ヲ賃借スルコトヲ得ヘク
- 五 國法ニ依リ別國ノ國民カ取得占有スルコトヲ得又ハ得ルコトアルヘキ各種ノ動産又ハ不動産ヲ相互ノ條件ニ依リ且當該國法ノ定ムル條件及制限ニ從ヒ取得占有スルノ完全ナル自由ヲ享有シ内國民ニ對シテ制定セラレ又ハ制定セララルコトアルヘキ所ト同一ノ條件ニ依リ買賣交換贈與婚姻遺言其ノ他ノ方法ニ因リ之ヲ處分スルコトヲ得ヘク又其ノ財產ノ賣得金

- 及總テ其ノ動産ヲ國法ニ從ヒテ輸出スルノ自由ヲ享有シ外國人タルノ故ヲ以テ之カ爲同様ノ場合ニ内國民ノ負擔スル所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル税金ヲ課セラルコトナカルヘク
- 六 身體及財產ニ對シテ常ニ完全ナル保護及保障ヲ享受シ其ノ請求及權利ヲ主張擁護セムカ爲自由且容易ニ各裁判所ニ申出ツルコトヲ得且内國民ト均シク右裁判所ニ於テ自己ヲ代理セシメムカ爲代理人及辯護士ヲ選擇使用スルノ完全ナル自由ヲ享有シ其ノ他司法ニ關スル一切ノ事項ニ付一般ニ内國民ト同一ノ權利及特權ヲ享有スヘク
- 七 内國民又ハ最惠國ノ國民ノ納付シ又ハ納付スルコトアルヘキ所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル何等ノ課金租稅手数料又ハ貢納ヲ徵收セラルコトナカルヘク
- 八 又保稅庫入ニ關スル便益獎勵金及戻稅ニ關スル一切ノ事項ニ付内國民ト全ク均等ナル待遇ヲ享受スヘク

第二條

兩締約國ノ一方ノ國民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ陸軍海軍護國軍又ハ民兵ノ何レナルヲ問ハス總テノ強制兵役ヲ免レ且服役ノ代トシテ課セラルル一切ノ貢納ヲ免レ又強募公債及軍用徵發又ハ取立金ニ付テハ不動産ノ所有者賃借者又ハ使用者トシテ内國民ト均シク課セラルルモノヲ除クノ外亦一切之ヲ免ルヘシ

第三條

兩締約國ノ一方ノ國民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ有スル家宅倉庫製造所及店舖並一切ノ附屬構



造物ニシテ適法ノ目的ニ使用セラルルモノハ侵スヘカラス右建物又ハ附屬構造物ニ付テハ内國民ニ對スル法定ノ條件及方式ニ依ルノ外隨檢搜索ヲ爲シ又ハ帳簿、書類若ハ計算書ヲ檢査點閱スルコトヲ得ス

第四條

兩締約國ノ一方ハ他ノ一方ノ港、都市其ノ他ノ場所ニ總領事、領事、副領事及領事事務官ヲ置クコトヲ得但シ右領事官ノ駐在ヲ認可スルニ便ナラサル場所ニ付テハ此ノ限ニ在ラス尤モ此ノ制限ハ一切ノ他國ニ對シテモ亦均シク之ヲ加フルニ非サレハ一方ノ締約國ニ對シテ之ヲ加フルコトヲ得ス

右總領事、領事、副領事及領事事務官ハ駐在國政府ヨリ認可狀其ノ他相當ノ證認狀ヲ得タルトキハ其ノ職務ヲ執行シ且最惠國領事官ニ證認セラレ又ハ認許セラルルコトアルヘキ特權、特典及免除ヲ享有スルノ權利ヲ有スヘシ認可狀其ノ他ノ證認狀ヲ發給シタル政府ハ其ノ裁量ヲ以テ之ヲ取消スノ權利ヲ有ス但シ其ノ取消ヲ爲スニ付テハ之ヲ正當ト認メタル理由ヲ説明スヘシ

第五條

兩締約國ノ一方ノ國民カ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ死亡シタル場合ニ死亡者ノ本國法ニ依リ相續財產ヲ收受管理スルノ權利ヲ有スル者其ノ地ニ在ラサルトキハ死亡者所屬國ノ當該領事官ハ必要ナル手續ヲ履行シタル上右死亡者財產所在地ノ國法ノ定ムル方法及制限ニ依リ該相續財產ヲ保管管理スルコトヲ得

締約國ノ一方ノ國民カ他ノ一方ノ版圖外ニ於テ死亡シタルモ該版圖内ニ財產ヲ所有セル場合ニ相續財產ヲ收受管理スルノ權利ヲ有スル者右財產所在地ニ在ラサルトキハ亦前項ノ規定ヲ準用ス

死亡者ノ相續財產ノ管理ニ關スル一切ノ事項ニ付締約國ノ一方カ別國ノ領事官ニ現ニ許與シ又ハ今後許與スルコトアルヘキ權利、特權、恩典又ハ免除ハ締約國ノ他ノ一方ノ領事官ニ即時且無條件ニテ之ヲ及ホスヘキモノトス

第六條

兩締約國版圖ノ間ニハ相互ニ通商ノ自由アルヘシ

第七條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ハ他ノ一方ノ版圖内ニ輸入セラルルニ當リ其ノ何レノ地ヨリ到ルヲ問ハス別國ノ製産ニ係ル同様ノ物品ニ適用セラルル最低率ノ關稅ヲ課セラルヘシ

締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ハ他ノ一方ノ版圖内ニ輸入セラルルニ當リ其ノ何レノ地ヨリ到ルヲ問ハス別國ノ生産又ハ製造ニ係ル同様ノ物品ノ輸入ニ對シテ均シク適用セラレサル何等ノ禁止又ハ制限ヲ加ヘラルルコトナカルヘシ但シ公共ノ健全及畜類又ハ農業上有用ナル植物ヲ保護スルノ必要ニ基キタル衛生上其ノ他ノ禁止ハ此ノ限ニ在ラス

第八條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ニシテ他ノ一方ノ版圖ニ輸出セラルルモノハ其ノ輸出ニ當リ別國ニ輸出セラルル同様ノ物品ニ對シ徵收スル所ト異ナルカ或ハ之ヨリ多額ナル課金ヲ徵收セラルルコトナカルヘシ又如何ナル物品タリトモ締約國ノ一方ノ版圖ヨリ他ノ一方ノ版圖ニ輸出セラルルニ對シ同様ノ物品カ別國ニ輸出セラルルニ對シテ均シク適用セラレサル何等ノ禁止又ハ制限ヲ加ヘラルルコトナカルヘシ



第九條

兩締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ニシテ他ノ一方ノ國法ニ從ヒ共ノ版圖内ヲ通過スルモノハ直過スルト又ハ通過中荷卸及庫入ノ後更ニ荷積セラルルトヲ問ハス互ニ一切ノ通過税ヲ課セラルルコトナカルヘシ

第十條

國家、地方官廳又ハ自治體ノ利益ノ爲兩締約國ノ一方ノ版圖内ニ於テ物品ノ生産製造又ハ消費ニ課セラレ又ハ課セラルルコトアルヘキ内國稅ハ何等ノ理由ヲ以テスルモ他ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ニ對シ同様ノ内國品ニ對スルヨリモ多額ナルカ或ハ重キコトヲ得ス 締約國ノ一方ノ版圖内ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ニシテ通過又ハ庫入ノ目的ヲ以テ他ノ一方ノ版圖内ニ輸入セラルルモノハ内國稅ヲ課セラルルコトナカルヘシ

第十一條

兩締約國ノ一方ノ國民タル商工業者及該國ノ版圖内ニ於テ住所ヲ有シ共ノ業ヲ營ム商工業者ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ本人自ラ又ハ旅商ヲ使用シテ物品ヲ買入レ見本携帶又ハ不携帶ニテ注文ヲ取集ムルコトヲ得而シテ右商工業者及其ノ使用スル旅商ハ買入ヲ爲シ又ハ注文ヲ取集ムルニ當リ課稅及便益ニ關シテ最惠國待遇ヲ享受スヘシ

第十二條

前條記載ノ目的ヲ以テ見本トシテ輸入セラルル物品ハ其ノ再輸出セラルヘキコト又ハ法定期間内

ニ再輸出セラレサル場合ニ成規ノ關稅ノ納付セラルヘキコトヲ確實ナラシムカ爲ニ制定セラルタル關稅法規及手續ヲ履行スルトキハ各締約國ニ於テ一時無稅輸入ヲ許可セラルヘシ但シ此ノ特權ハ物品ノ數量又ハ價格ニ徵シ見本ト認ムルコト能ハサルモノ又ハ其ノ性質上再輸出ノ際検査スルコト能ハサルモノニハ之ヲ與フルコトナシ見本カ無稅輸入ヲ許可セラルヘキモノタルト否トヲ決定スルハ何レノ場合ニ於テモ輸入地當該官廳ノ權内ニ專屬ス 前記ノ見本ニ對シ共ノ輸出ノ際締約國ノ一方ノ稅關カ施シタル記號極印又ハ印章ハ右見本ノ詳細ナル説明ヲ記載シ該稅關ノ公ノ査證ヲ有スル目錄ト共ニ其ノ見本品タルコトヲ證明スルモノトシテ且該目錄列記ノモノタルコトヲ確認スルカ爲必要ナル外右見本ヲ檢査ヲ免レシムルモノトシテ互ニ他ノ一方ノ稅關官吏ヨリ承認セラルヘシ但シ其ノ特ニ必要ト認ムル場合ニハ更ニ記號ヲ該見本ニ施スコトヲ得

第十三條

兩締約國ノ一方ノ國法ニ從ヒテ既ニ設立セラレ又ハ今後設立セラルヘキ商工業又ハ金融業ニ關スル有限責任共ノ他ノ會社及組合ニシテ該國版圖内ニ住所ヲ有スルモノハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ其ノ國法ニ違反シサル限り權利ヲ行使シ且原告又ハ被告トシテ裁判所ニ出頭スルコトヲ得

第十四條

兩締約國ハ各締約國ノ通商及工業ヲ總テ最惠國ノ基礎ニ置クノ意思ナルニ因リ通商及工業ニ關スル一切ノ事項ニ付共ノ一方カ別國ノ國民ニ現ニ許與シ又ハ今後許與スルコトアルヘキ一切ノ特權、恩典又ハ免除ヲ即時且無條件ニテ他ノ一方ノ國民ニ及ホスコトニ同意ス



第十五條

本條約ノ規定ハ各締約國ノ領有シ又ハ管治スル一切ノ地域ニ之ヲ適用スヘシ  
本條約ノ規定ハ各締約國カ專ラ國境ノ各側ニ於ケル一定地帯内ノ國境貿易ヲ便ナラシムカ爲接  
境國ニ許與スル關稅上ノ殊遇、締約國ノ内國民漁業ノ產物ニ許與セラルル待遇又ハ日本國ニ近接  
スル外國領水内ニ於テ捕獲採取セラレタル魚類其ノ他ノ水產物ニ關シ日本國カ許與スル關稅上ノ  
殊遇ニハ之ヲ適用セシ

第十六條

本條約ハ批准ヲ要ス共ノ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交換スヘシ本條約ハ批准書交換ノ翌日  
ヨリ實施シ千九百二十三年七月十六日迄效力ヲ有ス右期間滿了ノ十二月前ニ兩締約國ノ孰レヨリ  
モ本條約ヲ消滅セシムルノ意思ヲ他ノ一方ニ通告セサルトキハ本條約ハ締約國ノ一方カ其ノ廢棄  
ヲ聲明シタル日ヨリ一年ノ期間ノ滿了ニ至ル迄引續キ效力ヲ有ス  
右證據トシテ各全權委員本條約ニ署名調印ス

千九百十一年六月二十一日「ベルヌ」ニ於テ本書ニ通テ作ル

秋 月 左 都 夫 印

「ドクトル」アー、ドイハー 印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ躋メル日本國皇帝(御名)此ノ書ヲ見ル有業ニ宣示ス

朕明治四十四年六月二十一日「ベルヌ」ニ於テ帝國全權委員カ瑞西國全權委員ト共ニ署名調印シタル  
日本瑞西國居住通商條約ヲ閱覽照會シ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百七十一年明治四十四年十二月十八日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ  
鈐セシム

御名 國璽

外務大臣 子爵内田康哉

朕權登顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十四年十二月十九日巴里ニ於テ日佛兩國委員ノ署名調印シタル日  
佛通商關係ニ關スル暫定協約延期ノ協約ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治四十四年十二月二十七日

内閣總理大臣 侯爵西園寺公望

外務大臣 子爵内田康哉

條約第十五號(官報十二月二十八日)

日佛通商關係ニ關スル千九百十一年八月十九日ノ暫定協約延期ノ協約

千九百十一年八月十九日調印ノ日佛通商航海條約ハ千九百十二年一月一日以前ニ實施スルコト能  
ハサルヘキヲ以テ日本國政府及佛蘭西國政府ハ日佛通商關係ニ關スル暫定協約適用ノ終止スヘキ  
千九百十二年一月一日ノ期日ヲ同年三月一日迄延期スルコトヲ約定ス但シ該通商航海條約カ右三  
月一日以前ニ實施セララルトキハ此ノ限ニ在ラス  
右證據トシテ下名ノ佛蘭西國駐劄日本國臨時代理大使法學博士安達峰一郎、佛蘭西共和國外務大



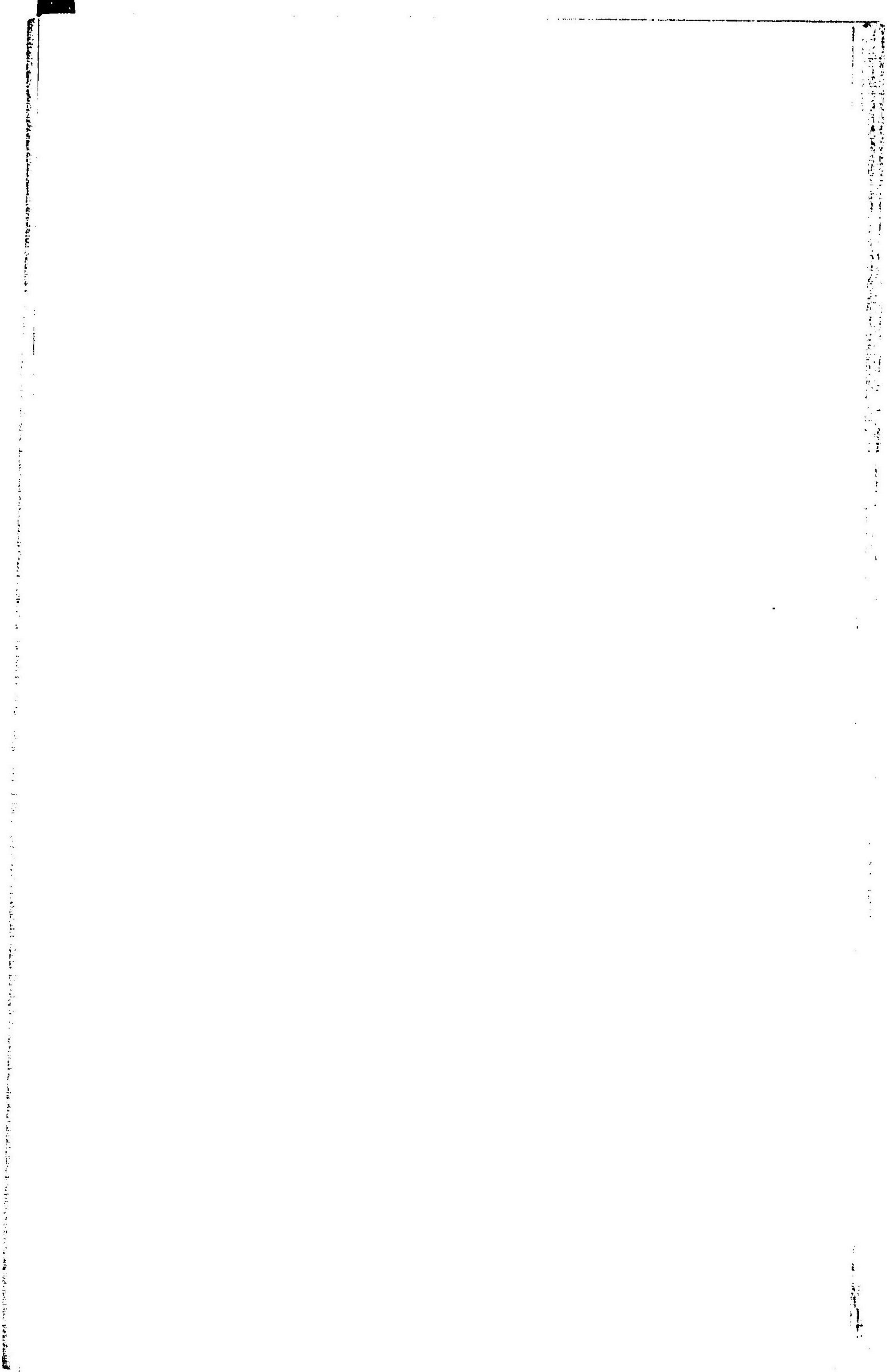
12-54

明治四十四年十二月 條約 第十五號 日佛通商關係ニ關スル千九百十一年八月十九日ノ暫定協約延期ノ條約 一〇六

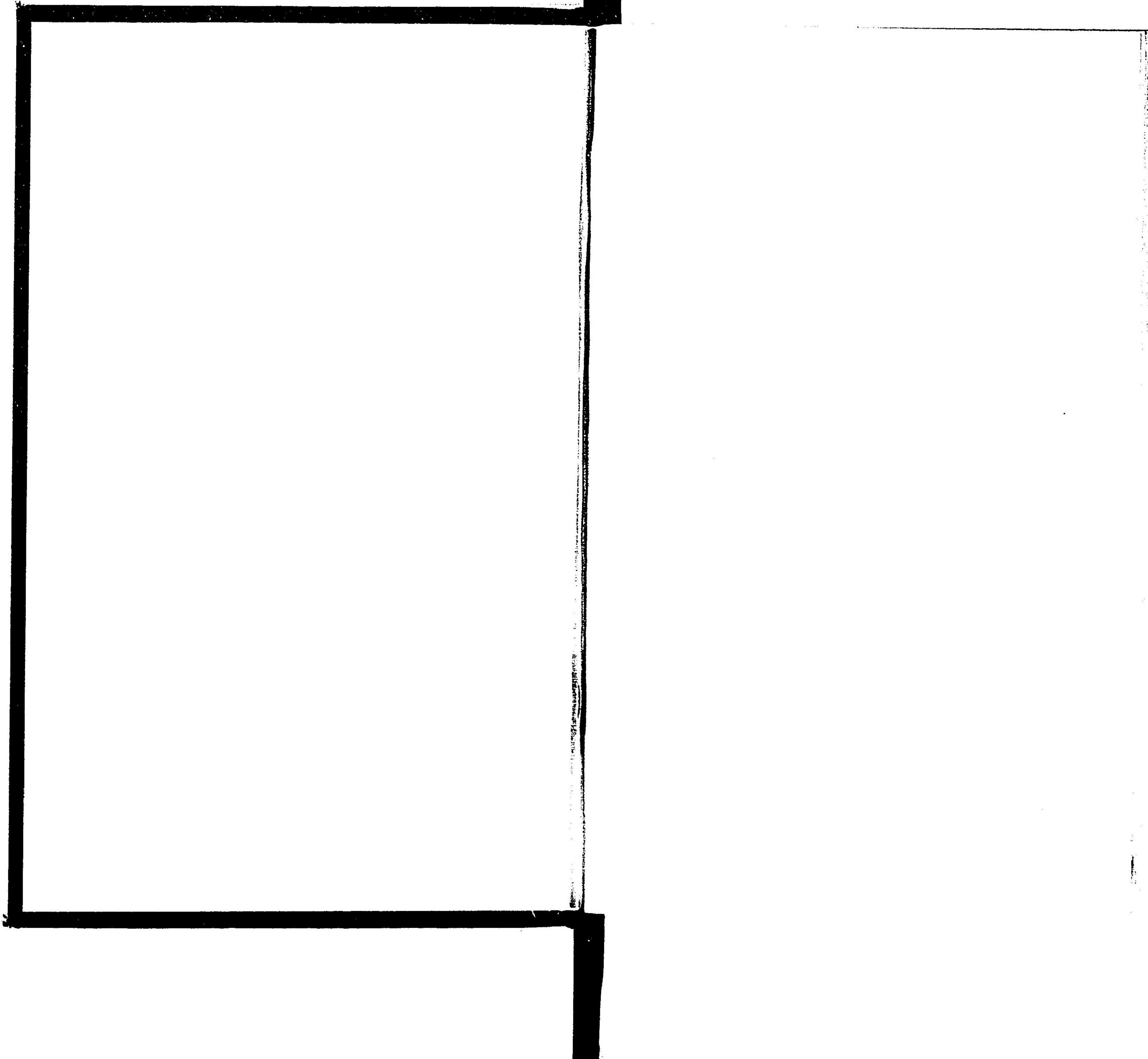
臣元老院議員シー、ド、セルツ、佛蘭西共和國大藏大臣代議院議員エル、エル、クロツク及佛蘭西共和國  
商工務大臣元老院議員シャルル、グイバハ各共ノ政府ノ委任ヲ受ケ本協約ニ署名圖印ス  
千九百十一年十二月十九日巴里ニ於テ本書ニ通ヲ作ル

安達峰一郎  
シー、ド、セルツ  
エル、エル、クロツク  
シャルル、グイバ

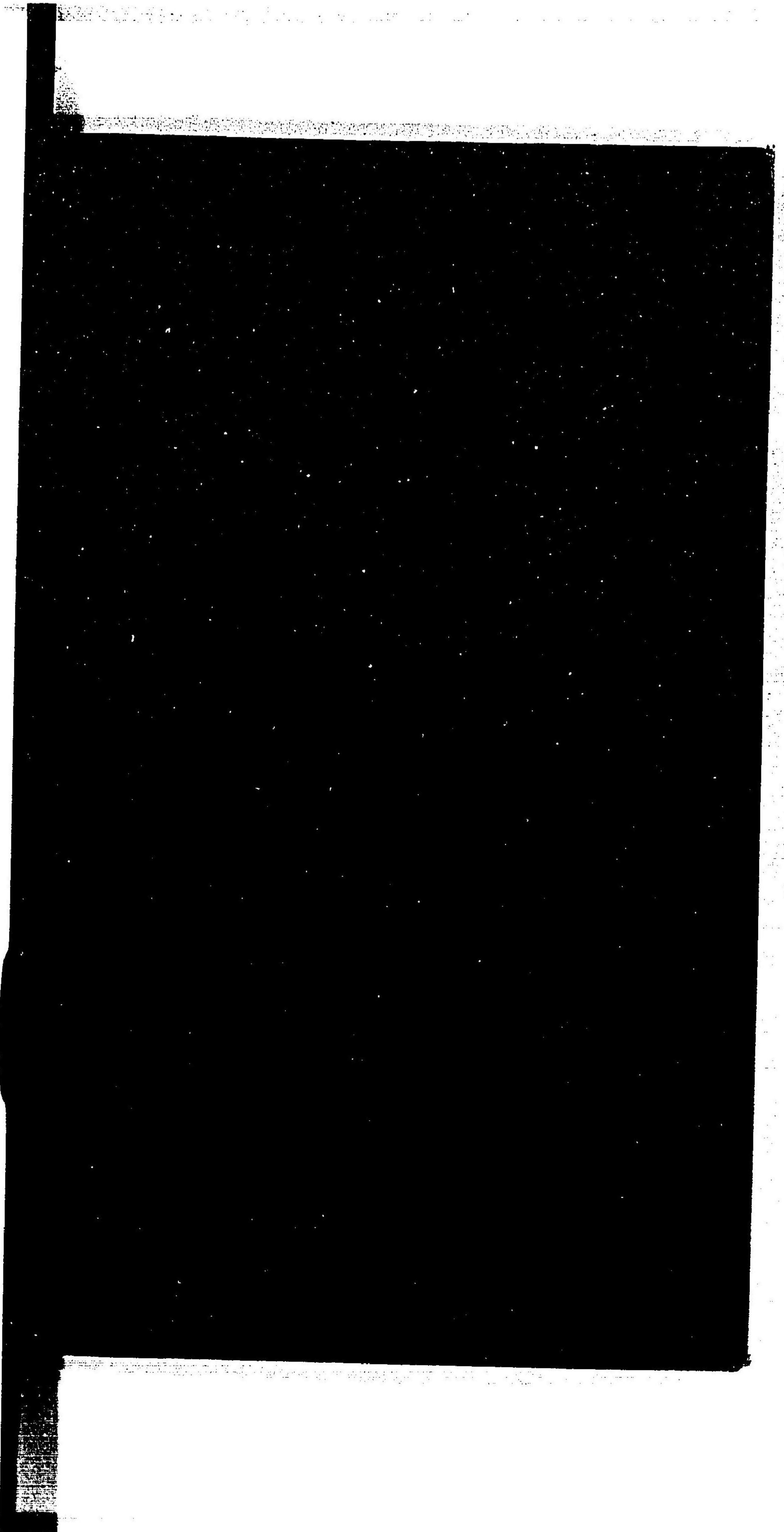














031130-130-3

CZ-4-1

法令全書 慶應3年10月-明治45年7月

内閣官報局

M20-45

BBC-1089





